

はまつた小兒は、不思議に、命を助りましたと、或人の話ちや、今お年寄の御難症は、この話にヨウ似てゐる、いざや我等が、司馬温公となりて、たとへばその古染付の壺が、失禮ながら、何ほど高金の品でも、お年寄よりの腕にはかへられぬと、しかづべらしく、きせるを引さけむかふへまはれば、年寄は氣のどくさうに、壺をかぶつた手をつき出すと、只一打にうち砕た、ナニガ坐中は金米糖がちらかつて、雪をふらした様になると、ヤレお年より、お助りなされたかと、其手を見れば、ぬけぬこそ道理なれ、金米糖を、一ぱいつかんでゐられたと申すことちや、ナントをかしい話ではござりませぬ歟、つかんだものをはなしさへすれば、自由自在に、手はぬけるものを、一度つかんだら、首がちぎれても、離すまいと、かた意地なうまれ付、それで自由自在の大安樂が出来ぬのぢや、かく申せば、錢かねの事のやうなれどつかむものは、是ばかりではない器量のよいのを掴み、かしこいをつかみ、まけをしみをつかみ、家からをつかみ、身代のよいのを掴んで、離すまいと、かつぎあるくに依て、教をきく事もならず、樂をする事もならず、慎みも出來ず、詮方なさに癪氣おさへたり、顔しかめたり、酒のんでまぎらしたり、さりとては、氣の毒なものでござります、壺わつて仕舞うてからは、何いふても詮ない事ぢや、身代の壺をわらぬさきに御用心が第一でござります、夫でもわが本心は、あきらか

な、明徳は曇つてはない、洗濯するにはおよばぬと、思ふ人があるものぢや、是をたとへて申しまするに、私のやうな目くらが、一人旅をして、心易い旅籠屋にとまり、あすの朝は七ツ立をさして下されと頼む、亭主も心得、朝早うたゞせまするとき、目くらは旅の支度をと、のへ杖を持って、出ようとすると、亭主がいふには、まだ夜深いに、提灯をおもちなされおかし申しますまいけれど、くらがりをとほく御出なさると、往來の人が行あたります、夫で提灯をお持なされと申すことぢや、成ほどさうぢや、私は行當らねども、得て目あきがつきあたる、さやうならおかし下されいと、提灯をさけて、道五六町出ました所が、むかふから來る人が、目くらにはたとゆきあたりました、ソコデ大きに腹をたて、おれに突あたるやつは目くら歟、向ふの人も疥癬にさわり、おれは盲ではない、さういふおれが、どう目くらぢや、イヤ〜おのれは盲ぢやけれども、人には突あたらぬ、おれが目くらに極まつた、向ふの人もいよく腹たて、おれを盲といふ證據は、何ぞ覺が有ていふの歟、オ、覺がある、おのれを盲といふ證據は、この持てる、提灯がおのれが目には、かゝらぬぢやない歟と、ズットさし出す提灯の火は、宿屋を出た門口で、疾にきて仕舞てある、ナント氣のどくな盲ではござりませぬか、

火もともさぬ眞くろな、提灯をさけて、是でもあきらかなとおもふてゐるには本心見うしなふて、身勝手な心を、本心ちやくと思ひ、洗濯せうとも、憤まうとは思はぬ人に、ヨウ似たものでござります、どうぞお互に、火は消てはない歟と、日々に吟味がいたしたいものでござります休息

續鳩翁道話 貳之下

「何事ものりをこえゆく世の人の、心にかたき關もりもがな」

いにしへは、國々に關をすゑて、まもりの人をつけ、往來の人をあらため、其子細なきものは、これを通し、子細あるものは、是をとめて都に告る、いはゆる美濃の國には不破の關、攝津の國には、須摩の關、あるひは逢坂または木幡など、是なり、今此歌のころは、人つねに、おそれ敬むの心を存して、私慾をふせぐ事は、猶關をまもりて、旅人を留むるがごとく、其よしあしをしらまほしと也、もがなとは、ねがひのことばなり、然らざれば、私慾常に本心をくら

まして、人の道に遠さかること多からんと、うち歎きたるさまなり、關守のたとへ、甚だ有難いことぢや、これ則明德をあきらかにするの手段、日新の工夫でござります、されば銘々どもが、人の道を失ひまするは、只おれがくゝの身最眞身勝手より、おこるのでござります、しかもこの身は、父母の縁によつて、生ずるとは申しながら、畢竟天地水火の塊ぢや、佛家では、地水火風のかたまりぢやと申して、是を四大といふ、この四大むすんで、形をなせば、六根を具足いたします、六根とは、眼と耳と鼻と口と身と意と、この六ツぢや、これをまた六識ともいふ、此上第七を心識といひ、第八を阿頼耶識とも、又含藏識ともいふ、此第七の心識が、一切の善惡邪正を辨別し、第八識は、一切の理を含んで、しかもする事なく、たゞ何ともなき物なり、以上これを八識といふ、識とは、しるといふ事ぢや、さて六識に對するものは、色と聲と香と味と觸ると法と、これを六塵といふ、およそ世界に、あるとあらゆるもの、此の六ツの外に、もれるものはござりませぬ、尤此事を委しう申すと、生藥やの店おろしするやうで、すべてチンプンカンに成て分らぬ、委しい事は、識者におたづねなされませ、此方に入用はない、只さしあたる所は、孟子に所謂、耳目の官は、思はずして物におほはると仰られて、目はみるが役、耳はきくが役、しかも見れども、何の色としらず、たゞ見るのみ、聞ども何の音としら

す只きくのみ、是を分別するものは、意識なり、しかれども得てわらい方へかたむきやすき意なれば、第七の心に、しつかり敬畏るゝ所があれば、人の道がつとまります、さすれば心は大切な關所ぢや、こゝで油断を致して、うかくすると、どのやうな悪事をおもひ付うやら、甚怖いものぢや、おそれ入たゝとへなれども、已に東海道には今切箱根、木曾かい道には、福島横川すべて、諸國の御關所で、明六ツの御太鼓がなると、御門がひらく、此とき御役人さまがたは一同に御列坐あそばされてござる、これが明六ツの太鼓をきいて、お上下をめすのではござりませぬ、夜半でも八ツでも、何時でも嚴重に御番をあそばさるゝによつて夜中何とき、御用物が通つても、ちよつともおさしつかへがござりませぬ、人の心も先其ごとく、ねても覺ても、立にもるるにも、畏れつゝしむの心が、番してゐれば、燈籠鬘や、三味せん太鼓、鍋やきすつほんどぜう汁を、めつたに、うかく通しはせぬ、誰しも用心する様なれどもいつても、通つてしまふた跡での後悔、これが、ちやうど、明六ツの太鼓を聞いて、門をひらくと、旅人は通りかゝる、ヤレ待てくれ、上下を着ねばならぬ、といふてゐる、其際に、よいものも、わるいものも、通り抜けて仕舞ふ様なものぢや、是ぢやに依て心の番が、きよろつくと、どんな大變が起らうやらしれませぬ、故に、明命をかへりみるとも、申してある、是について、おそ

ろしいはなしがござります、所は江戸の神田邊と聞たが、名は何とやら申して、いたつて貧乏なぐらし方、夫婦に子供三人、亭主といふは三十四五、女房は二十八九、家は九尺二間のうら店、鼠の巢を見るやうな住居、商賣は何と取さだめた事もなう、只明てもくれても、一合酒と女夫喧嘩、小博奕が商賣同前、あさは朝寝し、夜は夜ふかし、針を藏に積でも、たまらぬ身持ゆゑ、とうく、貧乏の底になつて、せう事なしに、青物賣と出かけ四五百文の錢で親子五人がその日ぐらし、あさ五百文で土物だなど、大根を買て、其日一日、江戸中を、大根くと泣あるいて、暮がたに七百文ばかりにし、内へ戻ると、米買へ、酒買へ、醬油かへ、油かへ、薪かへ、子どもの鼻ぐすり迄、二百文の錢で、あす一日の軍用金、のこつた五百は則あすの商賣のもと手、一日やすむと、一日くはずにねばならぬ、小せわしない身代、其中から無理無體に、雨がふるといふては、半日やすんで博奕うち頭痛がするといふては、晝からかへつて女夫けんくわ、親子五人が、くはずにゐる事も、折々あると、きゝました、こんな咄しは、お子たちもよう聞いて、お置なさるが宜しい、是はこれちひさいときに、とゞさまや、かゝさまのおつしやる事を聞なんだ報で、成人して、此やうに罰があたつて、難儀な暮をせねばならぬ、随分御兩親のおつしやることを、ヨウ聞ねばなりません、さてかの大根うりが、例の通り、一荷の

大根を荷ひ、朝早くから賣あるいた所が、どうした事やら、其日は一把の大根もうれぬ、日ざしをみれば、はや晝すぎ、腹の時計は八ツさがり、財布の中には、まだ一文の錢もたまらず、これはつもらぬ、此大根が、暮がたまでに七百文の錢に化ぬと、忽あすは、釜の中に蜘蛛の巣がはるどうしたらよからうと、工夫しながら、いつのまにやら、兩國橋をわたり、本所の屋敷町を大根くくと、うりあるいた、或おやしきの、表長屋のまどの内から、コレ大根やとよぶ、ヤレうれしや、先知行にあり付たと、よぶ所を見れば表御門から右へ三ツ目の、むしこ窓のうちから呼だのぢや、ソコデ大根やが、表御門から、荷をになひこんで、御長屋へまはつて見ると、門から三軒めの高塚のうち、門口には、何某と標札がうつてある、荷をもち込でみれば、縁さきの障子をあげ、旦那どのが今月代を、せられたとみえて、鏡たてに向ふて、自分髪をゆひながら、その大根はいくらぢやといふ、百に三把でござりますといへば、ソレハ高い、廿四文つゝにしておけといはる、賣たさはうりたけれども、現在損のたつ事なれば、ドウゾ三把にお買なされて下されい、今朝から江戸中を泣あるいて、まだ一把も賣ませぬ、どうでも賣て歸らねばならぬ大根、かけ直は一切申しませぬといふ、かのお侍がかぶりふり、夫れでもたかい、まからずば先よしにせう、邪摩ながら持て歸れと云捨て、縁前の障子を、はたとしめられ

た、大根屋もいろくといふてみても、かのお侍があひてにならぬ、ソコデ仕様もやうもな、ハテつもらぬ、モウ日の入には間もなし。何でも四五百の錢を持つて歸らぬと、親子五人があすの命がつながれぬ、なんとしたものであらうと、手を組で思案をしながら、縁前の銅盥に、フット目が付た、こゝが大事の聞所ぢや、心の關所が、ゆだんなく、番してゐたら、銅盥に目をつかぬ管ぢや、子のたまはく、君子固に窮す、小人窮すれば、こゝに濫すと、これは論語衛の靈公の篇に、孔子陳蔡のあひだにかこまれ、口中食を断て、門人ことごとくやみつかれて、起ことあたはず、子路といふ人、甚これを愠つて孔子に此事を問ていはく、君子もまた窮する事ありやと、此こゝろは、我師天にしたがふて道をおこなふ、何のゆゑに、かくのごとく困窮するぞと問はれた、そのとき、孔子の御返答には、君子固窮とは、凡人の貧富窮達、これみな天命ぢや、君子といへ共困窮すべきときいたらば、其困窮をまもるが、天命にしたがふといふものぢや、こんきうのときにあたつて困窮せまじと、さわぎ廻るは、天命にさかふて誠といふものにはあらず、されば困きうするときにあたつて、困窮するは、もとより、しれた事なり、しかるを、小人は困窮のときにのぞんで、無理に困窮せまじともかくゆる、終に悪心がおこつて、フトかなだらひに目がつくやうになる、こゝを指て、小人窮すれば、斯に濫すと、孔子は

仰られたのぢや、これは大根賣の事ばかりではない、われ／＼どもの身のうへにもこれに似た事があるものぢや、親類の無心據ない掛ぞん、或は病難、あるひは貧乏、その時が迫つて來たら、どう思ふても逃れられる物ではない、かるがゆるゑに中庸に、君子そのくらゐに素しておこなふと、有がたい天命の貧乏、有がたい親類の無心、有がたい掛ぞん、有がたい病難と思ふて、大切に天命を守つてゐると、物にはすべて、來るときと去るときとあるもので、貧乏し通しにするものでもない、おのづから逃れるみちが出来るものぢや、是によい譬がござります天竺で獵人が、猿をとるには、鞆をまるめて猿のまへに投出します、猿ははらたて、かのとりもちを、隻手づかみにつかむと、指がついて離れぬ、驚いて左の手で、かのとりもちを取除ようとすると、左の手もまたつく、ます／＼あわて、右の足をかけてとらんとすれば、また右の足もつく、いよく／＼うろたへ左の足でとらんとすれば、是も付く、只一とまるめの鞆のため、四ツの手あし、こと／＼くついてはなれず、さながら括り猿のやうになると、獵人が手足の間へ棒を通して、荷ふてかへるとき、ました、是はこれ身を逃れんとするによつて、括り猿になるのでござります、はじめ右の手でつかんだとき、騒がすと、じつと辛抱してゐるとおのづから、手のあた／＼まりで、鞆はたれて、自然とあやふきを逃れるに其辛抱が出来ぬによ

つて、うろたへ騒いでいのちをうしなふ、ナント氣のどくなく、り猿ぢやござりませぬ歎、とかく辛抱が大事ぢや、うろたへまいぞ、うろたへると、銅だらひがほしうなります、ソコデかの大根うりが、縁さきの障子は閉てある、あたりに見る人はなし、かの銅だらひを、水の入たまゝで、大根二三把の下へ、ソットかくす、怖いものぢや、今までひろかつた世界が、立どころに狭うなつて、五尺のからだを、しばらくもおく事がならぬ、ソコデ荷をかつぎ出して、門口を出ようとすると、障子のうちから、コレ大根屋と呼かけられる、ぬからぬ顔で、まかりませぬといふと、イヤ／＼直はねぎるまい、その大根買ふといひさま、障子をさらりと明られた、大根屋もびつくりしたが、どうぞして逃ていのうとおもひ、何把ほど入ます、はした賣は出來ませぬといふ、イヤ／＼はしたでは買はぬ、その大根みな買はふ、此縁さきへならべてくれと、いはれる、サア大根屋も一生懸命、障子のしまつてあるうちなら、銅だらひの出しやうもあらうに、今さら銅盤が出されもせず、といふて賣まいともいはれず、逃てゆかうにも荷を捨て歸つてはならず、千百萬の後悔も今に成ては間に合ず、うろ／＼としてゐると、かのお侍が、大根屋のかほをきつと見て、われはきつ／＼うろたへて居るぞよ、まづ銅盤から出して、大根の數を、かぞへて見よといはる、大根屋は總身に冷汗を流して、モウ切れる歎、ふたれるかと、

ワナ／＼ふるひながら、かのかな盥を恥かしさうにソツト出して、土に手をつき、旦那さま眞平御免なされて下されませ、何をかくしませう、先刻も申しまするとほり、今朝からまだ一文の商も、いたしません、このまゝ歸りますと、あす親子五人が、食まする事が成ませぬ、かなしい貧のぬすみ根性、めんほく次第もござりませぬ、七ツをかしらに子どもが三人どうぞ親子五人が命を、お助なされて下さりませと、色青さめて、土にあたたまをすり付て詫言する、かのお侍もひの外、氣だてのよい人で、さらに立腹のけしきもみえず、イヤ／＼其詫言には及ばぬ、まづ大根の数をよんで見よといはるゝ、恐怖ながら大根を縁へつみ上たところが、二十三把、かのお侍、やがて七百六十四文の錢をとり出し、かの大根うりをよんで、サア其方がいふ通りに、二十三把、七百六十四文、序にかなだらひをそへて遣す、貧のぬすみとはいひながら、われが根性は、餘ほどよごれてあると見える、此銅だらひは、顔や手あしをあらふ道具なれど、たゞ顔手足をあらふ許では有まい心のあらひやうも、ありさうなものぢや、無禮は咎めぬ、この銅盥を遣はす、持て歸つてとつくりと思案をし、心の垢をあらひおとせと、云捨て障子をしめてうちへはいる、大根屋は夢見たやうに、有がたいやら、恥かしいやら、禮もいはれず、詮方なさに銅盥と、錢を、荷の中へ入て早々にかのやしきをにけて出て、はじめて生

たやうに覺たが、恥かしいと思ふ心が、腹のうちに横たはつて、ウツ／＼と家に歸る、是から經文に説てある、觀音の御利生、刀又斷々壞の、功德の段ぢや、常ならば、小歌、うたひながら門口を這入と、荷籠を投して、錢財布を提げ、庭に立てるながら、まづ翌日の手くばりぢや、百が米かへ、廿四文が薪をかへ、十六文があぶらかへと、子どものはなぐすりから、今夜の寢酒のさかなまで、のこる所もなう、でかしがほでさはいする所なれど、けふは何と思ふてやら、いつにない門口をそつとはいり、しほ／＼と上り口にこしをかけてわらぢのひもをとかうともせず、物をもいはずさし俯てゐる、女房はくしまきあたまに、乳香子をふところへねぢこみ、埃はらひ持せたら、三寶荒神ともいふべきいきほひ、一調子はり上てうり上の錢を見せず、あやまつたきつねどの、やうに、俯いてばかり、居ねむつてゐるのか、但しはくらひ酔ふて戻つたの歟、見たくもない倒博奕と、御託宣を上て見ても、一言も返答せぬ、ソコデ女ばうが、合點がゆかず、荷の中をみれば賣上の錢もそのまゝ、外に見なれぬ銅盥があるゆゑ、これはこなたとこから持て歸らつしやつた、こちの内には不似合なかなだらひ、顔つきといひ、銅盥といひ、何ぞわけが有さうなとたくしかけて問つめる、こゝで亭主も面目なけにけふの始末を、いちぶ始終はなし、さて／＼其方が手まへも面目ないと、はじめて夢がさめてきた、こ

れが是(こゝ)れがありがたいものぢや、かのお侍(お侍)が、心を洗(あら)へと、御意見(ごいけん)の一言(いちごん)大根(だいこん)うりの腹(はら)に横(よこ)たはつたは、孟子(まつし)のいはゆる、羞惡(しゆうご)の心(こゝろ)は義(ぎ)の端(はし)なりと、仰(おほ)されたもこれぢや、此(こゝ)はつかしいと思(おも)ふは、本心(ほんしん)の發見(はつけん)、恥(はぢ)をさへわすれねば、人は身(み)はたつもの、わるうすると恥(はぢ)をかいても、恥(はぢ)かしいとおもはぬ人は、こゝろがよけれきつて、たとへば鏡(かがみ)のくもつて影(かげ)のうつらぬやうなものぢや、幸(さいはひ)に此(こゝ)大根(だいこん)うりは、よいお侍(お侍)に出(い)であふて、有(あ)がたい御意見(ごいけん)に預(あづか)つたので、本心(ほんしん)に立戻(たちかへ)られた、これを觀音(くわんおん)の御利生(ごりせい)といふ、もし此(こゝ)の時に、銅盤(どうばん)をぬすみおふせたら段々(だんぐ)盗(ぬす)みにおもしろみが付(つ)いて、はじめに恐(おそ)ろしいとおもふたのが、後(のち)には心(こゝろ)よりおほえる様(よう)になる、古歌(こが)に

『鳴子(なるこ)をばおのが羽(は)がせにおどろきて心(こゝろ)とさわぐ村(むら)すゞめかな』

これはこれ、ぬす人も、はじめには、己(おの)が足音(あしおと)におどろけども、後(のち)には石(いし)で戸(と)をたき割(わ)つて這(は)入(い)るやうになるは、鳴子(なるこ)におどろく村(むら)すゞめの、後(のち)には鳴子(なるこ)に馴(なれ)て、とまるやうになると、同じ(おな)じ事(こと)ぢやこれを習性(ならひせい)と成(な)るといふて、よい加減(かへん)に目(め)をさまさぬと、一生(いっしやう)すたりものに成(な)ります、この大根(だいこん)うりも、後(のち)には大盗人(おほなづかひ)にもなり、首(くび)の座(ざ)に直(な)るやうに成(な)るぢやけれど、かのお侍(お侍)の御意見(ごいけん)の聲(こゑ)が耳(みみ)に入(い)つて、たちもどりが出来(い)て見(み)れば、首(くび)きられる氣(き)つかひはない、これで見(み)ればお侍(お侍)は觀音(くわんおん)さまぢや、則(すなは)ち刀(た)又(また)斷(た)る壞(く)のくどくでござります洛東(らくとう)清水寺(しみずみづでら)の、御寶前(ごほうぜん)にかけたる、

繪馬(えま)を見(み)ますれば、罪人(ざいじん)がしばられて首(くび)の座(ざ)に直(な)つて、首(くび)をさしのべてゐると、其後(そののち)に太刀(たち)取(と)りが、太刀(たち)をふり上(あ)げてゐる、其上(そのうへ)の方に、觀音(くわんおん)さまのおすがたがあらはれて、光明(くわうみやう)をはなつてござると、太刀(たち)とりの太刀(たち)が、段々(だんぐ)にをれてをる所(ところ)が書(か)いてある、どなたも御ぞんじでござりませうが、これが、刃(や)又(また)斷(た)る壞(く)の功徳(こうとく)を書(か)いたらしたもので、みな心の事(こと)ぢや、こゝろさへ正(ただ)しければ、又(また)向(むか)ふつるぎはないものぢや、かるがゆゑに、仁者(じんしや)に敵(てき)なしとも申(まを)してある、されば此(こゝ)大根(だいこん)うりも、これから女夫(めよめ)こゝろを合せ、本心(ほんしん)に成(な)て、夜晝(よぢう)はたらき、終(つひ)に三年(さんねん)目(め)には、相應(さうおう)の八百屋(やっほ)になつて、はじめにかの銅盤(どうばん)をお侍(お侍)の方(かた)へもどし、厚(あつ)う御禮(ごれい)を申(まを)して、この御(ご)やしきの御出入(ごでいり)になりました、これが舊染(きうせん)の汚(け)をせんたくしたと、申(まを)すものでござります、是(こゝ)について話(わ)がある、さる片田舎(かたがたが)に、俄(にわか)に目(め)くらが出来(い)て、大(おほ)にくるしみ、諸方(しよほう)の醫者(いしや)殿(どの)に見(み)てもらふた處(ところ)が、内傷(うちやう)眼(がん)でなほらぬといはるゝ、いかゞはせんと、あんじ煩(わづら)ひましたが、幸(さいはひ)に近國(きんこく)に華陀流(くわだりゆう)の療治(りやうぢ)をする人(ひと)が有(あ)つて、腦體(なんたい)をひらいて、頭痛(づつう)の蟲(むし)をとるの、目(め)の玉(たま)をくりぬいで、洗濯(せんたく)するのと、とりぐの評判(ひやうはん)か、病人(びやうじん)さつそく尋(たづ)ねてゆき、療治(りやうぢ)をたのみました、醫者(いしや)どの心易(こゝろやす)くうけあひ、これは目(め)の玉(たま)をくり出して、洗濯(せんたく)すると忽(たちまち)に、見(み)える様(よう)になると、やがて療治(りやうぢ)にかゝり、難(なん)なく目(め)の玉(たま)を、ぬき出して、燒酎(しょうじゆ)であらひつるし、柿(かき)をほすやうに二(ふた)の眼(がん)の玉(たま)を、

竿にかけて干てをかれた、時に氣のどくな事ができました、家根にゐる鳥が見付て、目の玉を一ツくはへて逃ました、その羽おとにおどろき、醫者どのが見付て、肝を潰し、これはこまつた事ができた、目の玉が紛失しては、病人へいひわけがない、どうしたらよからうと、工夫してゐられたが、工夫もあればあるものぢや、側にねてゐる狗の子を見付て、これは屈竟なものがあゝ、此狗の目の玉を借用して、病人を本腹ささうと、忽ち狗を股にはさんで、苦もなく狗の目をぬき出した、狗こそ迷惑、きやんくといふて舞あるけど、醫者どのは、をさめた顔つきで、是も焼酎であらひ、よく乾かして、鳥の残した、一つ目と一對にして、やがて病人の目の穴へはめますと奇妙に目が見え出した、病人は大いによろこび、狗の目が交つてあるともしらず、きよろくとして、うれしがる、醫者どのもをかさをかくして、どうぢや、見えはかはつた事はないか、イエ、何にも變りました事はござりませぬといふ、醫者ど押つけ、何ぞ變つた事が有さうなものぢや、ヨウ氣を附て見さつしやれと、いはれて、成ほどソウおつしやると、少しかはつた事がござります、さうであらう、どう變りました、ハイ只今雪隠へ参りまして、下をのぞいたとき、右の目では、きたなう見え左の目では、何とやらこのも、思ひますといはれました、好ましい筈ぢや、ひだりの目は狗の目ぢやこれが是、銘々

どもにヨウ似たはなしぢや、忠孝はよい事と思へど、又どうやらすると、いやになる、とくとお考へなされて、御らうじませ、うろたへると人も半分、獸の仲間入をしてゐる事があるものぢや、盗むの殺すのといふ様な大よこれはあるまいけれども、また少々づゝの垢づきがあるまいともいはれぬ、目の玉のせんたくより、心のせんたくが肝心でござります、ある人の歌に『ふりにけるならのみやこの習はしも、あらたまりゆく君がまことに』
猶跡は明晩おはなし申しませう下座

續鳩翁道話 參之上

詩云邦畿千里、これ民の止まるどころなり、これまた大學の傳に、商頌玄鳥の篇を引て、經文至善にとまるの工夫を、御しめしなされたのでござります、まづ邦畿とは、たとへば山城大和河内和泉攝津を、五畿内といふやうなもので、畿内は天子の御座所、千里とは、其廣きをさして申します、維民の止る所とは、からもやまとも、天子のおはします所を、都といふて、

土地うるはしく、四方へ通路よく、何ひとつ不自由なる事なく、おのづから風俗もいやしからず、萬事につけて、便よければ、人多く集りすむ、止るといふは其所へうつり住で、外へ動かぬと申す事ぢや、されば此詩をおひきなされたる意は、人の本心、もと明らかなるものなれば、是にしたがふときは、君に事へ、親につかへ、夫に事へ目うへに事へ、世間の人にまじはるまでも、力をいれずして、自由自在なれば、此にとまればとの、おしめしてござります、これを至善にとまるといふ、さてこの至善は、形の上で見ますれば、孝弟忠信、禮義廉恥、そのあぢはひをいはんとすれば、啞がゆめを見たやうなもので、人に對して話されませぬ、しかれば何もない歎と申せば、ないではない、押して申さうなら、きよろりとした様なものでござります、又斯申すと早合點して、さては何もしらぬ、きよろりとしたを見るやうなもの歎、とおもへば、先師塔庵先生の道歌に『きよろりとはいかなるものかしらねども、味噌をねぶれば、味をしる』と申して、たとへば、長吉どのが晝寢をしてゐる、男ともしらす、女ともしらす、また寝てるともしらす、なにもしらすところへ、旦那どのが、コレ長吉とおよびなさんと、其聲の下から、ハイと返事が出る、またおさよどのか長吉どんと、呼ぶ聲のしたに、ハイと返事が出る、このハイとハイとは何ものが分別して、返事をしわけた、チトかんがへて御らうじませ、味噌

をねぶれば味をしる、しかも知るといへば、何ぞしるらしいものがある様に聞えますれど、なにもしるらしいものはござりませぬ、又ないといへば、何もないと御合點なさるれど中々さやうなものではござりませぬ、所詮あるともないとも、分別はとまませぬ、只きよろりといったして、用が勤まるのでござります、今ひとつ申して見ませう、赤子の生れおちた所は、只芋蟲を見る様にうごくくと動くばかり、目もみえねば、さだめて耳も聞えますまい、もとより物はいはれずたゞオギャアと、此とき智慧らしいものも、分別らしい物も、何もありません、見えますね、しかるに母おやが、乳ぶさをふくめると、赤子が舌をもつて、其乳ぶさをまいて、乳を吸ます、この乳首を舌でまかねば、吸れぬといふ事は、何者が分別したぞ、ナント奇妙なものではござりませぬ歎、その赤子がどうもせずには只大きくなりましたので、ござります、三ツのとし智慧を貰ふたのでもなし、五ツから分別が出来たのでもなし、もとより、ただ赤子が成人したのなり、しからば三十も赤子、五十も赤子、八十も赤子、赤子となるもかはりはない、赤子には私の心がない、至善ばかりぢや、大人には私の心が有て、夫だけ赤子とちがひます、かるがゆるゑに、孟子も、大人は、その赤子の心をうしなはずと、仰られました、赤子の心とは只私の心のない事を申しますのぢや、私心なければ、至善ばかりで、我といふ

ものはない、我といふものがなければ、只むかふまゝなり、向ふまゝなれば、忠孝おのづからつとまる道理、この我なしを見つげよと、先師がたの御世話を、なされるのでござります、すでにいろはうたにも

『我をたてねば悪事は出来ぬ、しれよころにわれはないと、』堵庵先生も仰られて、我なしの勤は、勤といふことをしらぬ、もし勤をする事あらば、それは我ありといふものでござります、おれは嫁ぢや、おれは姑ぢや、おれは旦那ぢや、おれは娘ぢや、おれは親を大事にかけてゐる、おれは奉公に、精を出してゐると、覺たらば、本真ものではござりませぬ、たとへば人、つねに額を忘れてゐれど、額を覺ると、かならず頭痛がしてあり、齒はつねに忘れてゐれど、覺るときは齒がいたんである、此方にこたへがあると、真ものではござりませぬ、今一ツたとへて申ませう、楊弓をひくに、的にあたれば、カチリと音がして、矢が戻り、こたへがある、しかれども、是は、的の真中に、中つたのではない、きりといふて、的のまん中に穴がある、これにあたると、矢ももどらず、カチリといふ音もなく、こたへがないこゝが至善の場ぢや、これを我なしと申します、カチリ〜と音の間は、まだ我があると思しめせ、若また大間違にまちがふて、人の道を失ますると、する事なす事、矢が幕へあつた様なもので、尻すほ

りに、ごそごそと落ちてしまふ、埒もないものでござります、道は須臾もはなるべからず、道にあたれば、生れるも死ぬるも、苦しむも樂しむも、我なしにするゆゑ、我にはあづからぬ、かるがゆゑに、大安樂でござります、又人のみちを失ますると、生死苦樂しつかりとこたへが出來ます是は丁度、いたむに依て齒をおほえ、いたむによつて額を覺るやうなものでござりますこのところをヨウ味ふて御らうじませ、兎角道でなければなりません、朝に道を聞いて、ゆふべに死すとも可なりと、孔子子の仰せられたは、偽ではござりませぬ、斯う申ても、かしこいお人は中々御合點なされぬ、聖人の道ぢやの、仁義五常のみぢやのと、そんなまはり遠いみぢでは、今の時節に、世わたりが出来るもの歟、とかく近みちでなければならぬと、滅多に近みちをこのむ人があるものぢや、其ちか道トントあてに成りませぬ、これについてをかしいはなしがある、さるところに勘辨者が有て、何事によらず、近道をこのむ人ぢや、あるとき一人旅を致されましたが、途中において、尾籠な事ぢやが、急に大便にゆきたうなつた、日ざしを見れば四ツ半すぎ、いま一ト息あるいたら驛までゆくぢやに、こまつたものぢや大用に際がある、と、餘ほどの道を損せにやならぬ、どうぞあるきく、用を便する仕かたはない歟と、色々近道をかながへても、小用とちがふて、大用は工めんがわるい、とかくするうち、ます

ます急に成てくる、せんかたなさに、道ばたの野雪隠へ、はしりこみ、ほしい、まゝに、黄海にまたがりながら、是はつまりぬ斯際どつてゐると、大分のみちがおくれる、どうぞ仕やうはない事かと、勘辨を廻らしたが、忽ち一ツの近みちを思ひついた、其仔細は、時は晝まへ、今こゝで隙をいれて、又むかふの驛で晝支度をする、二重三重の休息になりことさら、茶の錢もいり、かたぐもつて不勘辨ぢや、それより、斯してゐる際に、懐中の辨當をしてやると、茶の錢もいらす、二重やすみもせず、至極よい近みちぢやと、靜にやき飯をとり出し、菰だれのすきまから、菜種ばたけを遠見して、悠々と食てゐられた、扱樂あれば苦ありぢや、氣のどくな事が出来た、山蜂の大きなやつが、かの雪隠へ飛こんで、大事の所をさしをつた、びつくりして蜂はらう拍子に、手にのせた皮包みの焼飯を、おもはず野壺へとりおとして、又びつくりし、暫くのぞいてゐられたが、横手を打てハ、アこれは近道ぢやといはれたナントおもしろいはなしではござりませぬか、是ほどの近道はない、焼めしをかみこなして、喉を通し、腹を通して、而して後下へおろすのでござります、それを直に手のひらから、野つほへおとしたものなれば、弓と弦ほどちがふ近みち、此上の近道はない、こゝが大事の聞どころでござります、近みちはちか道なれど、喉をこさぬと、やき飯が鳥にならぬ、まはり遠いやうでも、本

街道でなければ、近道はやくにたゝぬ、金まうけの近みちしては相場事にかゝり、立身出世の近みちしては山事にかゝり、婚禮のちか道しては、主親の家をほり出され、葬禮の近道しては、心中身なけ首くゝり、みな氣のみじかい人たちぢや、短慮功をなさずのうたに『いそがすばぬれざらましを旅人のあとよりはる、野路のむらさめ、』しばらく見あはせて辛抱すると、時節到來のあるものをさり逆は短氣ものが多い、繪蛩たる黄鳥、丘隅にとゞまるといふて、聲面白うさへづる小鳥も、身の大事はようしつて、高いところや木深いところの、枝葉のしけつた中に身をおいて、やすらかに遊んでゐる、これは弓鐵砲もとゞかす、うつ事のならぬ所を考て、とまるのでござります、さるによつて、孔子も、この詩を御評判なされて、止るにおいて、其どゞまるところをしる、人をもつて、鳥にだも如ざるべけんやと仰られた、これは鳥におとるといふ事ではない、人として、鳥にもおとるべき歟と、激まして志をおこさせ、我なしの場所にとゞまらさうと、有がたいお示しでござります、すべて、鳥にかぎらず、蜘蛛は、大風ふく前には、巢をたゞみ、狐は、雨ふるまへに穴をふさぐと申しつたへて、未然にそのわざはひを用心いたします、人は只、利慾のために、まなこくらんで、目の前に倒るゝこともしらす、あれがほしいこれがすまぬと、何事も自分の才覺で、出来るものゝ様におほえ、ならぬ事もある

様に心得て、無理無體にくるしみます、其實はあくびひとつ、くつさめ一ツ、指一本うごかす事も、時節到来でなければ、本眞の事は出来ませぬ、心學をするは、何も外の事を、稽古するのではござりませぬ、なる事はなるとしり、ならぬ事はならぬとする、故に甚安樂にござりませぬ、此安樂をせうとおもへば、本心をするが始ちや、本心をしれば、無理は出来ぬ、もし本心をして、無理をする人が有たら、それは本心をしらぬのでござります、かく申せばわたくしが無理せず、無理いはぬやうに聞えますれど、中々さやうではござりませぬ、箕うり笠でひると申して、かへつて常に無理をいたします、これについて今ひとつ話がある、ちやうど私のやうなものが、死で極樂へ参りました、觀音勢至が御出むかひなされて、やがて阿彌陀如來の御前へつれて御出なされた、如來のおつしやるには、向後其方も、極樂の仲間いりをするものなれば、ごくらくのやうすも、見覺えておかねばならぬ、今日はまづ見物をしたがよいと、觀音さまに案内を仰付られました、觀世音心得て、かの亡者を導き、そこへと極樂の體用を御見せなたる七寶莊嚴目をおどろかし、天人の舞樂耳にみち、八功德池には蓮のはなぎかり、伽藍頻伽のさへづる聲は、うぐひすよりもおもしろく、あなたこなたと見物するうち、一の堂へ御案内なされた、見れば質屋の藏の中見るやうに、四方に柵をつりまはして、夥しいきくらけ、數の子が

つみ上である、さては百味の飲食を、調進する御臺所かとおもひ、觀音さまに申すは、あの仰山なきくらけは、佛達の食物に、なりますの歟と、問ましたれば、イヤ／＼あれはきくらけではない、それなら何でござります、さればあれは、人、娑婆にありしとき、常に忠孝の話を聞いて、實にもと思ひ、また談義説法を聞てありがたいと思へども、身につとむるところの所作は、悪いことばかりしてゐる者が死ぬると、からだは無間地獄へおち、耳ばかり極樂まゐりする、あれは耳の佛になつたのぢやと、仰られた、ソコデ又おたづね申すは、耳の干物は聞えましたが、あのかずの子は、極樂には不似合なもの、あれはどうしたことでもござります、觀世音お叱りなされて、めつさうな、極樂に腥いものが、あつてたまるもの歟、あれはかすの子ではない、娑婆にあるとき、口は忠孝をのべて、人を教訓し、口に經論を説いて、人を濟度し、しかもその身は、氣する氣まゝをはたらく、そんなやつが死ぬると、からだは忽ち地獄へゆき、舌ばかり極樂まゐりする、あれは舌の干物ぢやと、仰られた、ナントこはい話ではござりませぬ歟、私どもは、舌ばかり極樂まゐりする連中、またわるうすると、あなたがたは、耳ばかり極樂まゐりする、お仲間うちぢや、御油断はなりませぬ、感心上手のおこなひ下手、口ばかりの龍がしらで、尻のないにはこまつたものぢや、堯舜の御代といへば、遊んでゐても、口

過の出来るもの、やうに思ひ、延喜天曆の聖代といへば、只酒のんでゐるゝとおもふは、みな迷ひでござります、聖人の御代ほど、家業に精出し、正直にせねば、世わたりは出来ませぬ、お互に今日、けつこうな御代に、生れ合せ、亂ばう狼籍の憂もなく、山家の隅々海のはしく、まで、何ひとつ不自由のない、有難御上様の、御仁恵をかうむり、せめてもの冥加のために、めい／＼分限をかへりみて、其止るべき所にとまり、大切に御法度を守て、少しでも御苦勞をかけたてまつらぬ様にいたさねば、罰があたります、かした物を返さぬ敷、何ぞつまらぬ事が出来るかと御上様の御存じ遊ばした事の様に、假初にも公事訴訟、勿體ない事ではない敷、これ皆其とゞまるどころに止らぬによつてぢや、止る所とは、主人は家來をあはれみ、家來は主人をうやまひ、子は親に孝、親は子をいつくしみ、世間の人とは眞實にまじはる、これがお互の止り所ぢや、もし此場所をふみはずすと、何處まで落ちてゆかうやら、むしろの着物に竹の杖まで、うろたへると落ちます、自分の不了簡には氣もつかず、時節がわるいの、鬼門がたゝるのと、雪隠をたて直したり、親のゆづりの家藏を、切くだいたり、時節に科を負せて見たり、家藏に科をおふせて、我ががを遁れようとすれども、天罰はのがれぬ、尤家相も方角も、かまはぬと申すのではござりませぬ、それ／＼道理のある事なれど、所詮算用しあけた所は、心の事ぢ

や、家の本は身、身のもととは心ぢや其心がゆがんで有たら、人相がようても、家相がようても方位がようても、とても叶はぬ、内のやまひは、外から膏藥はつても治らぬ、人相がわるいといふて、ゆがんだ鼻が、ねぢ直されるものでもない、然れども、心のたて直しさへすれば、恐い顔も柔和になり、下品のすがたも上品になる、只大せつなは心のもち様ぢや、わが友何がしといふ人、商賣の際間なぐさみに、面をつくられましたとき、或人のいふは、此頃は顔色もよからず、なんぞ腹のたつ事はないかと、問れました、何がし合點ゆかすさらに腹たてた覺はござらぬといふ、たづねし人、ふしぎさうにして、歸られました、其のち半季ばかりたつて、又面を作る、さきに尋ねし人、折節また來あはせました、何がしさきの事をおもひ出し、此頃わが顔色は、いかにと問ましたれば、かの人うち笑て、至／＼く柔和で前に見し顔色とは、大きなちがひぢやといはれた、何がし此ときはじめて心付ましたは、さきに顔色の、恐ろしいはれしときは、鬼の面を作つてゐた、此面を作るには、かならず齒をくひしぱり、眼をいからせなと、こゝろにさま／＼工夫してつくる、其心わが顔色にあらはれ、恐ろしう見えたものと見える、今またおたふくの面をつくる、心にいかにも、愛嬌を思ふて、作るゆゑ、わが顔色おのづから柔和に、見えたものと覺える、さるにても心は、大事のものぢやと、物がたりいたされま

した、これでヨウお考なされませ、古人の語に、一切の法は、一心の異名なりといふてある、心をすて、別にとるべき法はない。心を正しうし、家業を精出して、家相も人相も、見ておもらひなされませ、休息

續鳩翁道話 参之下

『水鳥のゆくもかへるも跡たえて、されどもみちはわすれざりけり』
ナント有がたい歌ぢやござりませぬか、飯たきのおさんどんが、目をこすり／＼釜の前で火うちカチ／＼、此とき何がある、わしは大和の新口村で生れ、藪際の、次郎兵衛後家の、むすめぢやとおもはず、手でうつや足でうつや、さつぱりと何も無い、されども道はわすれざりけり、見事茶がまの下がもえる、旦那どのが、神の棚のまへで、どんがめや鯉鮒をよぶやうに、かしは手バチ／＼、此とき金もちらしいものが有た歟、百貫目もちやら、千貫目持やら、立てるたやら、坐つてゐたやら、されどもみちは忘れざりけり、影もかたちもない人が、子孫

長久、商賣繁昌といふ、何がふたぞ、うまいものぢやござりませぬ歟、朝から晩まで、我なして勤めてござる、樂なものぢや、これを至善に止まると申す、至善に止るといへば、何ぞ至善らしいものがある様におほえ、窮屈がつて、きく事もいやがる、至善はそんな、石で手をつめた様なものではない、あなたがたの、日がな一日何心なう仕てござる事が、皆至善の働きぢや、斯いふと、早合點する人は、そんならおれが、おやま買ふのも、ばくちうつのも、皆至善歟とおつしやらう、さううまうは、立合ぬ、至善は何もおほえませぬ、我なしのきつすいぢや、ばくちうつたり、お山買のは、われなしでは出来ぬ、人が見付はせぬ歟、聞てはるぬ歟、内の首尾はどうあらうと、何かはしらす、苦しいものをになひあるく、ナント至善に止まらぬといふものは、窮屈なものではござりませぬ歟、心に何ともなかつたら至善ぢや、心に咎めることが有たら、我なしではござりませぬ、どうぞ御機嫌よう、一日我なしでお勤なされませ、樂なものぢや、此我なしを、ようつとめた人がある、序におはなし申ませう、越前の國、大野郡大野領に、西市村と申して、御城下をはなれます事半道ばかり、高八石あまり、持ましたる、次郎右衛門といふ、百姓がござりました、女房には早うわかれ、忰一人もちまして、名を次左衛門と申しまする、親子さしむかひで、農業をつとめて、居まするうち、親類よりも、

この次左衛門に、嫁の世話をしてくれるものもござりましたれど、次左衛門合點いたしませず、その故は、次第にとしよられる親の事なれば、せめて心づかひを、懇ね様にいたしたい、他のむすめをもらへば、少々親の氣に、いらぬ事が有ても、義理なれば、辛抱もせねばならず左すれば、親に苦勞をかける事ゆゑ、まづ女房はもちますまいと、かたく斷を申して、心やすう親子くらすされました、ナント有かたい志ちやござりませぬか、是に引かへ、世間には、年のゆかぬうちから、女房を持たがり、百文の錢を、まうけるすべもしらす、親のお蔭で、ひだるい目せぬを、己が力とおもひ、わが口ひとつ給るほどの、手覺もないくせに、あんな器量は氣にいらぬの、こんな娘でなければ、ならぬのと、小言八百いひちらす不孝な子もあるのに、此次左衛門は、親の心をやすめうと、女房をことわりいふは、さりとは、やさしい志ちや、これがほんの我なしと申すもの、則ち至善に止まつてゐるのでござります、さて父の次郎右衛門は、ことの外長いきしたる人で、すでに年八十あまりに成て、老にほれちや、ことばも所作も不揃になり、たゞ小兒の様になられました、たとへのふしに、八十の三ツ子と申通り、ぐわんぜのない所作にて、九十六歳まで存命せられました、すべて此十六ヶ年の間、あとさきわかね親につかへて、一度もそむがず、實に我なしの行狀、その一二ヶ條をおはなし申しませう、

あるとしの冬、みぞれのつようふりまする日、次左衛門村用にて、御城下の郷宿、油屋何がいといふかたへ参られました、亭主何がし、次左衛門が形を見まするに、簀かさもきす、半道あまりを、みぞれにうたれて、参りましたれば、衣類は悉くつぶぬれ、亭主大におどろき、今朝よりのみぞれに、何ゆゑみのかさを着てはござらぬぞ、若寒氣にあたらばいかせらるゝ、早う衣類をぬがつしやれ、火にあぶつて、進ませせうといふ、次左衛門、笑ひながら、イエエぬれあるは常の事ちや、親どものいはれるやうに、致しますれば、おかけで寒氣も身にいらませぬ、出かけに簀かさの用意をいたしたれば、親どもが、いはるゝには、此天氣のよいに簀かさをきたら人がわらふ、やめにせよと申されました、夫ゆゑに、簀かさはきませぬと、何氣なき體に申されました、此事は油屋何がし、私へ直にはなしでござりまする、すべて忠孝の人は、寒暑もたやすく身を傷る事が、出来ませぬ、何ゆゑなれば、常に精神みちて、少しのすき間がないゆゑ、寒邪その虚をうかがふことが成ませぬ、銘々どもは、飽までにくらひ、暖に著て、猶それでも飽たらず、炬燵に寄り、すき間の風をふせぎ、其うへ居間に火鉢をたくはへ、間をあたくめると名づけて、しきりに暖氣をこしらへ剩、酒をのんで晝寐まする、これでは寒氣にあたらねばならぬ筈ちや、其うへに、間思雜慮で氣をやぶり、透間だらけのからだ

へ、滅多に陽氣をかり込んだものぢやによつて、立居する拍子に必陽は陰をまねいて、かのすきまより、寒邪をうちへ引いれますると、夫から肩がこるやら、頭痛がするやら歯がいたむやら、難なく、至極の病者となる、はなはだこはい事ぢや、わたくしどもが年中かやうなことをして、すたれものに成ました、御用心なされませ、忠孝はよい事といふばかりではない、第一はからだの養生、長生する妙術ぢや、どなたもお勤なされませ、又あるとき次左衛門、菜種を賣まして金三步をうけとり、て、親に見せて、これ程になりましたといふ、父はにこ／＼して、其うち二歩、おれによこせといはる、ハイといつて、金二歩をわたし、さらに其仔細を問ませぬ、父は二歩のかねを財布にいれ、首にかけて、うちの馬が大分よわつた、此二歩の金をあの馬に足して、博勞どのへ往て、よい馬と仕かへて來うといふ、次左衛門大によるこびホンニ馬がよわかりました、御くらうながら、よい馬と、お仕かへなされて下されいと、申されました、實は小百姓の事なれば、馬を持はいたしませぬども、父が馬といへば、其意にしたがふて、馬といふ、さらに一言も咎めませぬ、菜種代、金三步は、小家では、いたつて、大切の金でござりますれども、父の望むときは、明日の事も思ひませず、たゞ父のこゝろにまかせて、一言も口ごたへをいたしませぬは、いたつて成にくい事ではござりませぬ歎、さて次郎右衛門は

老にこそほれたれ、もとより達者なれば、かの二歩の金を持って、杖にすがりて、御城下へ出であなたこなたと、古道具屋をみあるきましたが、或家にて、塗盃のかけ損じたと、印籠のそんじたるを手にとり、値段を尋ねましたれば、此家の亭主、心さまのよからぬ者か、代金二歩なりと申しました、次郎右衛門よろこんで、二歩の金をわたし、かの印籠と、さかづきを持って、家に歸り、コリヤ／＼次左衛門、よいものをもとめて來た、これを見よと出して見せる、次左衛門これをみて、是はよいものを御買なされました、次郎右衛門笑ふて、缺そんじたる所を直しておくと、お客のあるとき、間にあはふと思ふて買てきた、左様なら、ぬり物やへやりませう、オ、さう仕やれ、又此印籠はくすりを入て、其方が腰にさけてゐると、田へ往たとき、にはかに腹でもいた折に、間に合ふとおもふて、かふて來たといはれました、次左衛門落涙して有がたうござりまする、ヨウ氣を付て、買て來て下されたと、眞實に悦ばれたと申す事ぢやすべて此次左衛門、老に耄たる父につかへて、更に父を、老にほれたる人とせず、何故なれば、只親にむかへば親ばかりにして、我といふものをたてねば、詞を返す世話もござりませぬ、此一條、古人のいはゆる、孝子に私のたからなしと、あるは、これでござりませう、されば次左衛門の孝心、人を感せしむる所あるにや、はるかに日がたちまして後、かの古道具屋、孝心の

ほどをつたへき、まして、心に恥かしく思ひましたか、ひそかに二歩の金を持參し、無調法のよしことわりいふて、缺損したる道具を、乞もどして歸りましたと、うけたまはりまする、又ひと、せ秋のはじめ、父の次郎右衛門わが田を見まはりに出ましたが、俄にかへつてしかり聲にて、餘所の田はみな刈入をしたのに、ナゼうちの田は刈らぬのぢや、早う往て田をかれといふ、次左衛門、こゝろよううけ合ひ、この頃はことにおくれました、ドレ往て刈て來ませうと、鎌を腰にさいて出かけましたが、頓て少々刈てもどりました、父大に悦び、よう刈て來たと、一段のきけんにあつたと、承はりました、この時まだ秋のはじめ、青田でござりまするを、一言も詞をかへさず、親の意にまかせて、青田をかつて來ました事、見る人みな感心せぬものはなかつたと申す事ぢや、實にめづらしい孝子でござります、猶この外、次左衛門の行狀中々一夕二夕には申し盡されませぬ、中にも耳をおどろかす行狀、いま一つおはなし申ませう、父次郎右衛門、とし九十あまりのとき何おもひました歟、次左衛門にいふやう、そちが月代は、きつう延て見ぐるしい、久しぶりでおれが剃てやらう、剃刀を合せて、持てこよと申されまして、次左衛門こゝろ得て、いかさまこの頃は、いそがしさに取まぎれて、髪月代もいたしませぬ、夫はありがたうござりまする、どうぞ剃て下さりませと、剃刀をとり出し、能とぎて父に

わたし、其身は水にて、さかやきをぬらせば、父はわが膝を叩いて、こゝを枕にせよといふ、ハイといふて横になり、父の膝を枕として、すこしも恐れたる色はござりませぬ、さて此はなしを致しますると、中には理窟をおつしやる方があつて、夫は孝子といふものではない、大膽ものといふのぢや、九十にあまつて、老耄したる親に、剃刀をもたせるといふ事があるもの歟、もし親の身に、疵が付たら何とするぞ、またおのれが身にあやまちがあつたら、どの命をもつて、親を養ふぞ中々孝子といふものは、其様なあやうい事は、せぬものぢやとおつしやる、随分御尤でござります、去ながら大舜か、または孔夫子が、此次郎右衛門に、おつかへなされたならば常に髪さかやきも、立派にして、斯様に不意のことは、聞かぬ様になされませう、邊鄙にうまれて、本もよまぬ、百姓一むきの人なれば、夫ほどまでは、とゞきませぬ、しかし此理窟は、其場の時宜、そのときのもやうをしらぬ人が、疊のうへで、分別して、いふことぢや、めいゝ共は兎角、その智慧つかひがあつて親のこゝろにしたがふことが出來ませぬ、この金かみなに成たら、あすはどうせう、青田をかつたら、あとの工めんが、わるからうと、とかく前後に氣がつき過て、得て親の氣をやぶりまする、孝子は親ある事をして、我ある事を知らぬ、晋の王祥が、氷をたゝいて鯉をもとめ、吳の孟宗が、雪中に笥をぬき、後漢の郭巨が、

兒を埋ころさんと致したことなど、今の人に見せたら、氣違ひのやうに思ひませう、是はこれ、親に鯉がたべさせたいと、おもふ心ばかりで、氷をふむのあやふきをしらす、親に笥をまゐらせたいと、思ふ心ばかりで、時節をわする、これみな古今孝子の常でござります、日月はいまだ地におちず、神明のてらし給ふ所、孝子のころざし、感應のないといふ事はござりませぬ、もとより次左衛門は、父を老翁せし人とは生涯思はず、さるによつて、其危きをしらぬのでござります、此しらぬのが、中々常人のおよぶ所でござりませぬ、しかればといふて、親が盗をしにゆくの、子が其提灯もちをするを孝行ぢやといふのでござりませぬ、幸ひおたがひに、斯様の變に出合ぬはありがたい事でござります、さて父の次郎右衛門は、ふるふ手に刺刀をもち、次左衛門が左の鬢のかみを、何の苦もなく、ゴソ／＼とそり落し、手を以て其跡を撫ながら、さてもうつくしう成たといふ、次左衛門も又自らなで、ホンニうつくしう成ましたと、親子もろとも、うち笑ふて居たるとき、庄屋何がし、折ふし用事ありて、参りましたが此體を見て、大にあきれ、其仔細を問ましたれば次左衛門、ありのまゝにはなして、顔つき平生にかはらずと承はりました、さればこれらの行狀、終に御領主様の、御聞に達し、御褒美として、御米おびたしく、下し給はりしかば、隣境これをつたへ聞て、おのづから不孝の子弟

もかれこれ行狀を、あらためましたるものも、ござりましたといふ事ぢや、語にいはいく、徳孤ならずかならず隣ありとの聖語、むなしからず、此西市村は、小村にて、家數わづかに十五六軒、しかれども孝子順孫、相つゞいてたゆるときなく、今なほ、又市長右衛門など申して、御褒美、頂戴いたしたる人々、堅固に耕作をつとめてゐられます、さて父の次郎右衛門、九十六歳にて、病死いたされました、次左衛門もその、ち、甥をやしなふて、子といたし、その身は生涯無妻にて、長壽いたされました、寛政二年すでに年七十歳、そのころの太守様、ことさら御仁恵ふかく、老人御いたはりとして、御領分中へ、御酒下さるゝにつき、六十以上の老人を、村々にておしらべなさるゝ事がござりました、去によつて西市村にも村役人の宅へ、次左衛門をまねき、其としを尋られました所が、次左衛門さらに年を申しませぬ何ゆゑぞとへば、さる仔細あつて、私の年は、どうも申されぬといふ、村役人もこまり、此度の事は、御領主さまの御慶事につき、御酒代を下される事なれば、有がたい事ぢや、何も年をかくすには及ばぬ、あり體にいはいはれよといふ、然れども次左衛門一向承知せず、何ぞん年を申すことは、御免にあづかりたいと、ひたすらに申まするゆゑ據なく段々、このよし、重役へ聞えまして、終に御役人さまより、御吟味になり、何ゆゑとしを申されぬぞ、もし申されぬ仔細あらば、其子

細を申せと、仰られました、ソコデ次左衛門も詮方なく、さやうならば、年の申されぬ仔さいを、申し上ませう、私親次郎右衛門、存命中、わたくしへ申まするには、其方がとしを、人がたづぬるとも、必ずいふてくれな、そちが四十になるの、五十になるのと年をいふてくれるとおれはいかう、心ほそう思ふによつて、必としをいふてくれなと、申されました、親ども相果まして、年月は立ますれども、申されましたことは、猶耳のそこに、残まして、今のやうに覺まする、ことさらお佛壇に見てござるゆゑ、なんほう御上様の事でも、こればかりは、御めんなされて下されいと、落涙して、申されました、是によつて、此段御聞に、達しましたれば、殊の外御感心あそばされ、其せつ、又、御褒美を頂戴、仰付けられました、誠にありがたい、珍しいこととござりまする、孟子に、大孝は身を終るまで、父母を慕ふと見えましたが、この西市村の次左衛門は、實に其人とぞんぜられます、これについてをかしいはなしがある、さる所に不孝な息子どのが有て、母御の手にあはぬ、友だちが、氣のどくがつて、さる先生のかたへ、道話を、聴聞に、つれてゆきました、其夜の道話に、むかし或國に、孝子が有て、家まつしい、しかるに親子とも大病にとりあひ、こしが抜て、たつ事が出来ぬ、已に餓死にもおよぶ所に、孝心のほど、天の感應ありしや、隣の鶏がある日土のかたまりをくはへて、かの孝子の

まくら元に運ぶ、ふしぎにおもひ、碎き見るに、古金一步を得たり、これをはじめとして、日にはこぶ、終に此かねをもつて、薬をもとめ、本復して、剩さへ、のこる金を元手として、家をおこしたりといふ話をかの不幸もの、大に感心して、聞て居ましたが、内へもどつて、はやおやにいふはおれもこれから、孝行するほどに、鶏を二三羽かふて来て下されといふに、母おやよろこび、孝行は嬉しいが、其鶏は何にするのぢや、ハテさて買ふてござれといふに、跡でしれる事ぢや、それでも、鶏が孝行になりさうな事でもない、殊に此米のたかいのにと、半分いはせず、ハテやかましい、こなたの様に小言いふと、孝行も出来るものぢやない、老ては子にしたがへぢや、往て買ふてござれといふのに、母親もせんかたなくにはとりを二三羽かふて来た、ソコデ息子はうれしがり、舌つみうつて鶏をよび餌をやりながら、コレ母者人をちら向つしやれ、脊中さすつてやらうイヤ、私は肩がつかへはせぬ、又こなた小言をいふ、だまつて肩を出さつしやれと、無理無體に肩をさする、鶏がうらへゆくと酒飲で寝て居やるとかくして、三十日許りたち、モウ鶏が、土くれをくはへて、來さうなものぢやと、毎日までども、しるしがない、不孝もの大きに氣をいらちさりとては目のあかぬ鶏ぢや、これ程に孝行するの、己れが目にかゝらぬ歎、よいかげんに目をさませと鶏をつかまへて述懐いふ、鶏も氣

のどくに思ふた歎ある日、土のかたまりをくはへて来る、息子は悦び、これは大ぶん大きなかたまりぢや、小判であらう歎、二歩金であらうかと、碎て見たれば、蚯蚓が出た、不孝者肝をつぶし、ナンボウ時節柄でも、せめて一朱ぐらゐるは、有さうなものぢやに此さまは何ぢやとにらみ付て吐ますれば、鶏もかんしやくに障たやら、大きな口明て、ベツカコウ、と啼ました、ナントおもしろいはなしでござりませぬ歎、家業もせずして、金がほしいの、わるい身持でよいところへ嫁入がしたいの、遊んでゐて、うまいものがくひたいの、博奕うつて響られたいのと、そんなこといふ人は、みなベツカコウにあふ、御連中ぢや、此無分別をやめにして、どうぞ至善の場にとゞまり、我なしで、おつとめなされませ、ある人のうたに、

『よしと見る其ひとふしをなには江の、あしかるかたにうつさずもがな、』
 あとは明ばんおはなし申ませう。下座

續鳩翁道話終

續々鳩翁道話 壹之上

天の命これを性といふ、性に率ふこれを道といふ、道を修る之を教といふ、この三句は、中庸の首章に見えて、則大聖孔子の御孫子思はじめて是を御發明なされたる所にして、實に千載の格言でござります、されば今にいたつて、猶道學相つたはりまして、我々どもの様な者まで性理の端をうかゞひます事は、ひとへに子思のお力でござります、扱天の命と申すは、天のいひつけと申す事ぢや、時に天といへば、青い雲や、黒い雲ぢやと、思しめさうが、左様ではござりませぬ天は音もなく、香もなく、たゞ物を生ずる理がござります、これをさして天と申す、形の事ではござりませぬ、しからば、其形もない天が、何をいひ付ると、御不審におほしめさうが、キツトした、云つけがある、則天のいひつけは元亨利貞と申て、元はけじまる、亨はとほる、利はとける貞はなるといふて、此元亨利貞を、天の四徳といふ、則これが、天のいひつけでござります、さりながら斯様に申ては、子供衆に分らぬ、今一段ハッキリと申さう

ならば、春夏秋冬、これ元亨利貞の徳にして、人の目に見える所の天のいひ付でござります、天ものいはねど、何かはしらす春になれば、梅、さくら、桃、柳、誰が催促もせぬに、花がさき芽を出す、これを元と申す、さて夏になれば、枝葉がしけり、草木のすがた、うるはしう成ます、これを亨といふ、扱また秋になれば、栗の木には、栗が出来る、柿の木には、柿が出来る、草も木も皆實が出来、これを利と申す、又冬になれば木の葉は熟して、種になる、これを貞といふ、こゝをさして、天何を歟いふや、四時おこなはれ、百物なると、孔夫子も仰られました則中庸の、天の命とは、此事でござります、扱之を性と謂と本文にござりますは之とは、上にいふ天の命をさして申し、性と、人のうまれつきの心と申す事ぢや、則元亨利貞の天理をうけて、性となる、かるがゆゑに、朱文公は、性は理なりと仰られました、則本心の事で、ござります、此本心は、天理を其ま、うげましたるゆゑ、仁義禮智の徳を、そなへます、この仁義禮智が、則天の元亨利貞ぢや、所詮くはしう申せば、天徳の元は、物のはじめなり、四季にとれば春なり、五行にとれば木也、方角にとれば東なり、性の徳にとれば、仁でござります、又天徳の亨は、物のとほるなり、四季にとれば、夏なり、五行にとれば火なり、方角にとれば南なり、性の徳にとれば、禮でござります、さてまた天徳の利は、物のとけるな

り、四季にとれば、秋なり五行にとれば、金なり方角にとれば、西なり、性の徳にとれば、義でござります、又天徳の貞は、物のなるなり、四季にとれば冬也、五行にとれば水也、方角にとれば北なり、性の徳にとれば、智でござります、さるによつて、小學の題辭にも、元亨利貞は、天道の常仁義禮智は、人性の綱と仰られました扱五常の信は、四季の土用、五行の土、方角の中央と同じ事で理において、少しも變る事はござりませぬ、このかはらぬ理が、人々に具はるうへは、天のいひ付に、違ひはない、故に天の命、これを性と申してござります、わらういたしますると、茶碗とりおとして、天命ぢやといひ、とうろく鬢で、鼻おとしても、天命ぢやといふ、これは天命の取ちがへ、天命は、其やうな細工ものや、干物ではない人は仁義の性をうけたれば、すこしでも、無理すると、直に氣味わるう覺える、これが、いきた天命でござります、ある人の道歌に

『やみがたきよしあればこそとしごとさけばかならず匂ふうめが香』
石川五右衛門でも、熊坂の長範でも、盗するのは、よい事とは思はぬ、これが則天命の御合點なされぬのちや、さるに依て、人の性は善也と、古人も仰られました、此性にしがひますれば、することなす事、皆人の道にかなひます、故に性にしがふ、これを道といふと申てご

ざります、道とは、自由自在の出来るといふ名ぢや、無理すると自由自在は出来ぬ、無理のない本心にしたがへば、自由自在で、安樂にござります、これを道と申します、されば性と道と、別のものではござりませぬ、斯申すと、そんなら、世界中の人が、みな天命の性をうけて、生れたれば、無理する人は、一人もない筈ぢやと、思しめさうが、いやな事には、性は天命の性なれども、形をうける事は、一樣でござりませぬ、凡形は、陰陽五行の氣のあつまつて、出来まするものなれば、その氣の清濁によつて、人の氣質も、いろいろになりまする、生れつきのころは、一列に善なれども、氣質のちがひで、下愚も出来、賢きもできる、過たるもありおよばぬもあり、天命の性は無慾にして、義理ばかりで、ござりますれども、形に墜在ますると、形の慾にひかれる所が、出来まする、ソコで得ては道をふみはずす、難儀なものぢや、かるがゆるに道を修むる、これを教といふと、申してござります、修るとは、ものゝ損じたるを修覆するころもちぢや人の性は善なれども、形にひかれて、次第に慾が出来る此慾が段々ふかうなり、終には大ゆがみにゆがんで、人の道をうしなひまする、ソコでをしへをたて、人々の分に應じて、其ゆがみを修覆いたし、もとの本心に立もどらせ、人の道を勤めさすのが、是則道をさむる、之れを教といふと、御示しなされたのでござります、さて中庸と申す事は、

能う、人の口くせにいふ事なれど、多くは中庸の取違を仕てござる、其取ちがへは、たとへば銀五匁やらう歟、拾匁やらう歟、一向中取て、七匁五分やると、これで丁度中庸ぢやと、思ふてござる、夫に子莫の中といふて、まことの中庸ではござりませぬ、譬ば夏は帷子を着、冬は綿入を着るこれ自然の中ぢや、然るを中とつて、一年中捨きるといふて、それでよいもの歟、チト考て御らうじませ名聞の心で、拾匁やるのでもなし、又しわんぼうで五匁やるのでもなし、只先方へつかはすべき、道理にしたがふて、此方に一物なければ、真の中には、これを君子時に中すと、申す、されば鏡の空なるがごとく、衡の平なるがごとく、只何ともないが中の極意ぢや、もし一物があれば、鏡は影をうつさず、衡目はくるふ、さるによつて、堯舜も中を執れと、仰られました、甚大切な事ぢや、わるうすると、中庸は、只書物の名とばかり、心得まして、受用にならぬと、詮ない事てござります、さるに依て、前に申す旨を、わが身に引うけ心に工夫して、用るねば成ませぬ、故に古人も、孔門傳授の、心法とは、仰られました、かほど大切な心法なれば、中々私どもの様な文盲な者が、申つくされる譯ではござりませぬ、よし又説盡したりとも、子ども衆や、女子衆のお耳には、入悪い、しかし此まゝでやむのも、本意ないものゆゑ、今一度、ちかく譬を取て、首章三句の意をくりかへしおはなし申しませう、

御退屈にあらうけれども、ようお聞下されい、此意が御合點がまゐりますると、一生身をまもるよい便になりまする、たとへば道中で、足のつかれたる時に、二三里駕籠にのると甚安樂なしかも僅の間ぢや、其わづかな安樂も、駕籠賃はらはぬと出来ぬ、ましてこれは、一生涯安樂になる法でござります、それを駄賃なしにおはなし申す事ぢや、せめて眠たいのを、辛抱してヨウお聞なされて下さりませ、先天の命、これを性といふは、たとへば此あたらしいきせるの様なものぢや、此煙管も、天陰陽五行をかつて、萬物を、化生する中に、眞鍮となり、しの竹となり、すでにきせるのかたちが出来る、チャント天理が具はつて、煙草がのめるやうになる其たばこののめるのがきせるの性ぢや、これが直に天理、天の命でござります、しかも天理は、どのやうなものぢやと、吸口から覗て見れば、雁首の中もらう竹の中も、すひ口の中もすつぱりと、綺麗に何にもない、只天氣の通ふばかりぢや、此天氣のかよふ所が、則きせるの生れつきのこゝろぢや、丁度赤子と同じ事で、わだかまりのない綺麗なものぢや、しかしながら綺麗なはいけれど、煙管も煙草のますに、さらぎせるでおけば、いつまでたつても、きせるの用はない、人もいつまでも、赤子で居ると、膈は綺麗なれども、ホギヤア／＼では、間に合ぬ、ソコデ性に率ふ、これを道といふて、さらぎせるで、煙草をのめば、心よう煙が通つて、

工合がよい、たばこののめるが、きせるの性にしたがふ道ぢや、赤子も次第に成人して、親につかへ、主につかへ、身をたて、名を後世に揚るが、其の道ぢや、きせるも天の一物、人も天の一物、非情をもつて、有情に譬へるは、異なるものなれども、何も變つたものではござりませぬ、扱道ををさむる、これを教といふは、かのさらぎせるで、煙草をのめばはじめの程はよけれども、次第に煙草を、のむにしたがひ、ソロ／＼中によれがつき、段々と脂がたまつて、後にはやにがつまつて、天氣がかよはぬやうに、成ますると、ほほべたをふくらして、吸ても、ズウ／＼いふて、煙草はのめぬ、これが赤子の成人に、能う似たものぢや、段々と、大きうなつて、人にまじはり、ものにふれ、人慾のよれがつき、後には、おれがおれがの、氣隨氣まゝが、かたまつて、天理をふさぐ様になる、丁度きせるの、脂でつまつたと、かはつたものではござりませぬ、見れば立派な煙管ぢや、取上げて、たばこのんで見れば、ちよつともめぬ、然ればといふて、きせるの形があれば、さすがに捨てても、仕舞れぬ、ソコデ據なう、煙草盆の中で、コロ／＼とこつついてゐる、人もこれと同じことで、人慾のかたまつて、天理を失ふた人は、どうも仕方はござりませぬ、見れば立派な男ぢや故に取上げてつかふてみれば、ちよつとも間に合ぬ、さすがに人の形して、生てるものなれば、殺しても仕まはれず、また用

にも立ぬ故、親兄弟に、勘當しられて、あちらではごろ／＼、こちらではごろ／＼と、雷のやうに、なりちらかして、ごろついて居る人がある、これみな脂のつまつた、きせる仲間ぢや、得て天竺には、たんとござります、さるによつて、きせるのつまつたは、小捻を通し、薬すべを通して、中を掃除すれば、本の通りに、煙草がのめる、これがきせるの道を、修むる、教でござります、人もこれと同じ事で、氣隨氣まゝの、かたまつた人でも、聖人の教を聞いて、腹の中を、掃除すればもとの赤子と、おなじ事で、腹の中が綺麗になり、本心にたちもどられますナント、よう似たものではない歟、天の命、これをさらきせるといひ、煙草ののめる、これを道といひ、掃除をする之を教といふ、御合點がまゐりました歟ある人の道歌に

『きせるさへ心のやにを掃除せすがん首ばかりみかく世の人』

これでおもひだした話がござります、さる町内に、年寄役をつとめらるゝ人が、ござりました、あるとき其息子殿が、親御へいはるゝには、此ごろ町内でも、隣町でも、親父さまの事を、さらきせるぢやと申ます、どうでもおまへさまの異名ぢやさうな、何の道理で、さらきせるとは付たでござりませうと、問かけられて、かの親父が、嬉しさうな顔付して、成程さらきせると付さうな物ぢや、夫はなぜでござります、されば何事を取捌いても、能う通た人ぢやと、おれ

を譽て、つけた異名とみえると、半分聞ず、息子がかぶりふり、イエ／＼さうではござりますまい、ソナナ何ぢや、ハイ私のぞんじますには、どうしても、つまらぬ人ぢやと、いふのでござりませうといはれた、ナントおかしい話ではござりませぬ歟、此親父さまもおれがの脂が、つまつてあるのぢや、それもしらすに、黒の羽織に、唐棧の袴、お太刀一本きめこんで、がん首ばかりみがつてござる、これは男ばかりの事ではない、籠甲のくし笄ぢやの、緋鹿子の鬚くゝりぢやの、生白粉ぢやの、ながし白粉ぢやのと、さまざまのみがき道具、むかしは足が二本あれば、濟だものぢやに、今は首すぢに、又二本足、こしらへて、都合四つあし、どうでも、狐や狸の、まねがしたいさうな、氣のどくなものでござります、兎角賑はしい土地にすむ人は、猶々つゝしみが大事ぢや、たとへば、あまり煙草をすかぬ人の、もつきせるは、おのづから脂のたまりが少い、夫は何ゆゑなれば、煙草の数をのまぬ故ぢや、又朝、寐處から、きせるをくはへ、日がな一日、こゝを大事と、きせるを離さず、尻から煙の出るまでのでござるたばこ好の、もつきせるは、直に脂がたまります、これはたばこの数をのむによつてぢや、人も是と同じ事で、三ヶの津をはじめ、其外繁華の地にすむ人は、朝から晩まで人まじはりが多い、そののみならず、あちらむけば芝居、こちらむけば、淨瑠璃、かる口ばなし、軍書講釋、

うなぎ、すつほん、どぜう汁、呉服みせやら、小間物店やら、見るに目の毒、かぐに鼻の毒、これでは脂がたまる筈ぢや、官刻の孝義録を、拜見するに、忠孝の人は、とかく遠國邊鄙に多い、これは是、人交はりがすくなく、見るに目の毒がないに依てぢや、人間一生五十年、付合するは、二ヶ村歟、三ヶ村ぢや、ある人の狂歌に

『ほとゝぎす自由自在にきく里は、酒屋へ三里豆腐屋へ二里』

またある人の發句に

『醫者どの、不自由な里の賀ふるまひ』

これらで御推量なされませ、かた田舎に育つ人は、自然と心のよごれが少い、すべて人にかぎらず、道具衣類家居まで、手数が入れれば、よごれるはしれた事でござります、かるがゆゑに、道をささむる教によらねばならぬ、扱此をしへを、たとへておはなし申ませう、脂がつまるとこより歟薬すべて、掃除せにやならぬ、掃除はよけれど、うろたへると薬すべが折こんだり、こよりがちぎれたりする、脂のつまつたは、あたゝめると、通る事があるけれど、小よりや、薬すべの折こんだのは、温めても茶を通して中々通らぬ、やいてしまはにや埒があかぬ、これようお考なされませ、掃除道具の學問はよけれど、わるうすると、學問がをれこんで、お

醫者さまにも成らず、先生にもならず、又御出家にもならず親のしにせの商賣がいやになり、めつたに鼻がたかう成て、つかへてお辭儀が出来ぬやうに、なります、これが掃除道具のをれこんだのぢや、こんなきせるは、焼ねば直らぬ、甚怖い恐ろしい事です、御用心なされませ、是畢竟學問のはじめ、心むけのくひ違で、身をさめ、家をとゝのふる學問が、一生疵になつて、親類縁者、知音近づきにまで、きはらるゝ様になるは、まつたく書物のとがではない、學ぶ人の心得のわるいのと、お師匠さまを撰まぬ、過ちでござります、これを人のみちを爲て、人に遠ざかるは、以て道とすべからずといふてある、一たびわるい癖がつくと、どうしても止にくい、兎角わる癖を直す分別が、入用ぢや氣質を變化するは、學問の功、わる癖を直すは、則氣質を變化するので、ござります、此くせ付でおもひ出した、譬のはなしがござります、さる處に、いたつて煙草すきの男がござりました、用事有て紀州へ下る道すがらも、六ぶくつぎの大きせるに、たばこの煙の、絶る間もなく、長の道中をくすべあるいたが、世には似た人もあるものぢや、六十ばかりの親仁が、これもくはへ煙管で、フト道づれに成まして互に煙草すきなれば、はなしの間があひ、かの親仁がいふには、わしは是から一里計り向ふの在の者ぢやがナント今夜はおれが内にとまらッしやらぬ歟、何も馳走はないけれども、少々賞

合せた煙草がある、おふるまひ申さうといふ、京の男も大によろこび、夫は近頃かたじけない煙草さへおふるまひ下されたら、湯も茶漬も入用にはござらぬ、お辭儀なしに参ませうと、打つれて、かの親仁の宅へ、参りました、さて洗足もすみ、夕飯もした、ゆゑ、坐敷で一ぶくすべてゐる所へ、主の親仁がたばこ盆をひつさけ、隻手には紙袋二三もち、さて御退屈にござりませう、さらばお約束の御馳走をはじめませうと紙袋の煙草をひねり、雁首へねちこみ、吸付て客へわたし、是から取かへ引かへ、透間もなく、すひ付ては出し、吸付ては出す、客も圖にのり、國づくしよむ様に、煙草の名所それは是歟と、いふてゐるうち、座敷うちは、煙でつまり、胸はいらいら、あたまはふらく、今二三ぶく強つけられたら、忽息が絶さうで、すでに負色に成ました、さすが年よりの悲しさは、主のおやぢ、小便に座をたちました、此躰を見て客はいきたこゝちして、この隙に逃てかへらすば、いのちもせも、たまるまいと、そこら搜して、風呂しきづゝみを引かたけ表へ出たらば、又おやぢに見つけられて、煙草せめに出會ふてはたまらぬ、裏道から出奔せうと、切戸をはづし、畠道を横すぢかひに、めつた無性にかけ出したが、おもひがけない行先に大河がある、川の上下見わたせば、幸ひわたし船が見える、やにはに飛のり、さて此川は何といひます、これは日高川と申します、京の男きもを冷し、さり

迎は拍子がわるいと、胸を抱て居るうち、船は向ふの岸につく、ソコデ船頭へ頼むには、もしあとから、年の頃六十ばかりのおやぢが、たばこ盆をさけて、おれを尋ねてくる事があつたら必わたして下さるなと、いひすて、また一文字にかけ出したが、大きな寺でゆき留りました、走りこんで様子を咄しかくまふて下されといへば、和尚しかつべらしく、聲づくろひして、むかし此處に、まなごの庄司といふ者ありと、ながくと、道成寺の講釋がはじまる、かの男は氣をいらち、御説法はあとで聴聞いたしませう、どうぞ早うかくして下され、うろたへてゐると、親仁の煙草で、責殺されにやならぬといふ、和尚も氣のどくにおもひ、しからば先例にまかせ、釣鐘をおろして、隠してやらうと、鐘樓堂へつれてゆき、大勢よつて釣かねをおろし、難なく彼男を隠しました、氣のどくなものは、宿の主ぢや、客がかげ落したとは夢にもしらす今二三ぶくこじ付んと、座敷を見れば、客はみえぬ、さては煙草に聲かけて、出奔したに極まつた、おのれにけたとて逃さう歟と、尻引からけ、捻鉢巻し、紙袋と煙草盆ひつさけ、跡をたふて、川ばたへかけつけた、船頭は此體を見て、さては最前の追手ぢやさうなと、急に船を川中へ出す、かの親仁は、船をよべども返事せぬ、よし、船はなくとも、此河を渡らいでおかう歟と、鬼にも成らず、蛇にも成らず、難なく川を歩行わたりして、道成寺へかけこみ、

客殿方丈縁の下、雪隠までさがして見たが、流石男だけで、つり鐘には氣もつかず、是程にたづねても、行衛のしれぬは、大方道がちがふたのであらう、いづくまでも追かけんと、また門外へかけ出しました、此體を見て和尙はよろこび、皆よつて釣がねを引あけて見れば、京の男は湯にもならず、黙然としてゐる、サア／＼モウ氣づかひはござらぬ、おやぢは道が違ふたといふて、どれへやら行をつた、安心をさつしやれといふと、京の男が、胸なでおろし、ヤレヤレうれしや助かつた、モウ親仁は來ませぬ歎、それなら息休めにまづ一ふくいたしませうといはれた、ナントおもしろい咄ぢやない歎、燒類、火にこりすと、煙草責に出あふても、ヤツバリ一ふくいたしませうといふ、これ辯付と申すものぢや、古歌に

『人ごとにひとつの癖はあるものをわれにはゆるせ敷しまの道』
又諺にも、なくて七くせとも、申すれば、いづれ何なりとも癖付のない事はない、逆も癖付ものなら、心の脂を掃除するくせ付になりたいものぢや、少しでも心わるう覺る事があれば、是必ころのよごれ、脂のたまりでござります、何分をしへによつて、掃除を怠らぬやうに、いたさねばなりません休息

續々鳩翁道話 壹之下

『いつはりのなき世なりけり神無月たがまことよりしぐれそめけん』
此歌を、我得かたにとれば、元來天人一致なれば、誠もまた一なり、天誠あればこそ、冬になれば、必時雨する、天のみ誠ありて、人豈誠なからんやと、よみし歌と聞えます、中庸の十章にも、誠は天の道なり、之を誠にするは、人の道なりと見えまして、誠は天理自然の道、則本心のごとでござります、さて本心を思ふて、本心のごとく有たしと、かへり見るが、之を誠にする人の道ぢや、誠は勉すしてあたり、思はずして得ると申すは、何の造作もなく、又思慮分別もいらす、唯本心のさし圖にしたがへば、主親につかへるを始として、萬の事、みな程よく出來ます、これで中庸にかなひます故甚樂でござります、此樂な味が、則聖人のお心持ちや、さるに依て、從容として道に中るは、聖人なりと云てある、從容とは、無造作、無分別、無知、無心の事で、たゞ何ともなく、時に中するの自然の妙を、いふのでござります、天

無心にして、四季おこなはれ、人無心にして、忠孝がつとまる、天人一致、萬物一體、ナント、明白なものではござりませぬ歟、之を誠にするは善を擇んで、固くこれを執るものなりとは、修行の仕かたを、おしめしなされたのぢや、善を擇むは、此道理を一たび合點し、本心を見付るのでござります、固執は常に本心に目をなさず、私心私慾はまじらぬ歟と、朝夕に吟味して本心を取り失はぬやうに致すのでござります、これを精一の工夫といふ、所詮前もつて申す、天命の性にしたがふの事ぢや、ある人の道歌に

『わが性の人にかくれてしられずばたかまのはらにたち出て見よ』

おもしろい歌ぢやござりませぬ歟、チトおかんがへなされませ、人已が性ある事をしつて、其天にいつることをしらすと、朱子も仰られて、おたがひに、わしが心ぢや、おれが、心ぢやと、心のある事は知てるて、此心直に天ぢや、といふ事を知らぬ、若この心を天命の性ぢやと、合點したら曲たうてもまけられるものでござりませぬ、ヤツバリおのれが心ぢやと思ふ故、身慾のために、さんぐくに曲ます、生れ付の心が主となつて、身慾がしたがひますると、何事も程よう参ります、とかく慾心が主に成て義理の心が、つかはれまするゆる、人心これあやふく、道心これかぐると、申てある、何分わが心直に天ぢやと、決定して疑ひがなければ、自然

と私心は、したがひまする道理ぢや、さて斯様に申せば、人心ぢやの、道心ぢやの、私心ぢやの天心ぢやのと、いひならべてみれば、心が二ツも三ツもある様に聞えますけれど、左様ではござりませぬ、其實は一なれども、人の道を勤めさへすれば、又一とも思ひませぬ、只何ともない所がはじめて道にかなふのでござります、かれこれ名目を立るのは、道ををさむる教でござります、わるう心得た人は、聖人を意地わるぢやと覚え、忠義ぢやの、孝行ぢやの仁義ぢやの五常ぢやのと、六かしい教をたて、人を自由にさせぬ、責道具ぢや、たとへば、氣ちがひに猿くつわをはませ、手かせ足かせをいれて、しぼり上た様なものぢやと、おもふてござる、是は大きな簡ちがひぢや、譬てお話し申ませう、いなり山の松茸も、丹波の松茸も、松だけにはかはりはない陰陽五行にむしたてられ、松茸の形が出来ると、たべられるといふ天理がそなはる、夫を松だけが簡ちがひしてたべらるゝのは、己が力ぢやと心得天理ぢやといふ事をしらぬ、ちやうど、おれが心ぢやといふて、天命の性ぢやと知ぬやうなものでござります、さて松茸をたべるには、かならず柚をあいてにする、ソコデまっただけがおもふには、おれをつかふに、兎角柚をあいてにしるゝ、チト胡椒か、山椒か、からしても入さうなものぢやと思ふ、柚をいれるは人間がこじつけるのではない、松茸のうまれ付に、かなふに依てぢや、人も是と

同じ事で、忠孝をすゝめるは、人の生れつきにかなふ故で、ござります、馬にはくつわ、牛には鼻づる、これ皆人のこじつけではない、大きな獸をつかふに、轡がよければ、牛にも轡でありさうなものが、鼻づると替るは、牛のうまれつきにかなふ故ちや、されば忠孝をおすゝめ申すは、人の生つきに、かなふ故ちやと、思召せ、さるによつて、朱子も事の道あることをしつて、其性によることをしらすと仰られた、扱かの稻荷山の松茸は、御献上にもなり、風味もしごく、よろしければ、かつをぶしぢやの、酒しほぢやのと、出しを入れるに及ばぬ、又丹波松茸は味がわるい、ソコデ出しをいれる歟、生ぎかなの一切もいれねば、味がよい、出しをいれて、稻荷山の松茸の素焚と、丁度同じ様になる、ソコデ丹波まつだけが、腹をたて、めんようおれをたくには出しを入れる、ナゼ素だきにはせぬぞと小言いふ、ナント無理ぢやござりませぬ歟、味ない持合せがある故、據なう出しを入れるのでござります、同じ松茸とはいへども土地によつて、風味のよいとわるいとが、出来るは、丁度人の氣質に清濁のある様なものぢや、濁つた生れつきには、聖人のをしへをいれにや、人のみちがつとまらぬ、しからば教は、意地わるではない、此方に持合せがある、風味のわるい、丹波松茸の連中ぢや、仁義五常の、出しをいれねば、人なみには成ませぬ、聖人君子は、稻荷やまのまつだけでござります、かるがゆ

ゑに、聖人の教へあることを知て、其我もとよりある所のものによつて、裁する事をしらすと朱子も仰られました、是ぢやによつて何分教をきかねば、成ませぬ、是について、ありがたい話がございます、ひと、せ播州へ下りました節、姫路の社友、近江や何がしの物がたりを、承はりまするに、同國林田領、太田村の酒屋敷と申すところに、卯右衛門と申しまする、奇特の信者がござりました、此人若年の頃はことの外身持あしく、假初にも、大酒博奕喧嘩口論を仕出し、もとよりまづしい暮しで、ござりますれば、農業とても、はかしくしういたしません、馬道ひを渡世として、常に姫路の町へ通ひ、駄賃を取れば、ことごとく酒にかへ、その上酔狂しては、人を打擲する、是によつて、姫路の御城下は申すに及ばず、近村みなもてあましたる男でござりまする、女房にははやう離れ、男子一人ござりました、されども子をおもふ心もなく、只氣随氣まゝに、とし月を送りましたが、いかさま宿因を催す所歟、あるとき例のごとく姫路へ出ましたが、荷物のつけ合せあしく、馬を牽て、あちこちと荷をたづねあるくうち、東本願寺の御坊の前を通りかゝりました、折から御本山より、講師のお下向にて、御勸化最中とみえ、おびたしく、参詣群集いたしまする、卯右衛門も思ふ所あつて、馬を門前につなぎ、その身は参詣と、もに、御門内へ入り、御堂の縁に腰うちかけ、あながち聴聞する心では、な

けれども、參詣の人数多ければ、よい喧嘩のあいてもあつたら、酒代にせんと考へ居ながら聞ともなし、聞ぬともなしに、ホツ／＼と御勸化の聲が、耳に入る、其大旨は、造惡の凡夫、一善を修したる覺えもなし、たとひ其身、阿修羅羅王のいきほひありとも、無常の殺鬼はふせぐ事あたはず、閻魔王の使に引たてられ、紅蓮大ぐれん、焦熱大焦熱のくるしみを受る時、血のみだを流したりとも、萬劫苦患をまぬがる、事かなはず、しかるに彌陀超世の悲願と申すは、かくのごとき、十惡五逆の罪人を目あてとしてたたまふ、本願なれば、一たび此佛に歸命したてまつれば、たちどころに光明の中にをさめとられ、命終れば、極樂淨土に、往生せん事、何のうたがひかこれあらんと、こま／＼と聞えました、此とき卯右衛門宿善開發の時節、到來したる歎、發露涕泣し、信心肝にそみて、夢のさめたるがごとく、年ごろの惡行を後悔し、のちには大聲をあけて泣きました此とき卯右衛門、年四十ばかりと承はりまする古歌に

『さへられぬ光のあるをおしなべてへだてがほなる朝霞かな』

ナントありがたい歌ぢやござりませぬ歎、今此卯右衛門が忽惡念をひるがへして大信心を得ましたるは、化導の利益とは申しながら、ひとへに佛智力の致す所でござります、去ながらたとへ佛智力ありとも、卯右衛門に佛性がござりませずば、善人にはなりませんまい、宿善すなはち

佛性がある故ぢや、是を孟子も、性は善なりと仰られました、凡一切の有情非情、佛性を具へぬはござりませぬ、さるによつて、釋尊も、草木國土、悉皆成佛の金言がござります、甚ありがたい事ぢや、諺に佛法と薬屋の雨は、出てきけと申します、何様聞ねば信心も起らぬ、是ぢやによつて、教によらねば成ませぬ、佛法はおのづから佛法の妙がある、儒はおのづから儒の妙がござります、神道もまた此通りぢや、おの／＼、その趣はちがふやうにござりますれども、所詮人を教へ善をすゝめ、惡を懲すの外はござりませぬ、こゝにいたつては、三教一致でござります、或人の道歌に

『雨あられ雪やこほりとへだつれど解ればおなじ谷川の水』

法華は佛になられぬの、念佛は地ごくへゆくの、さま／＼すがたは替りますれど、落るところは谷川の水ぢや、何もかはつた事はござりませぬ、是でおかしい話がある、さる所に、法華寺と、淨土寺と、垣をへだて、隣つから、毎朝花を折に出ては、顔見あはすと宗論がはじまる、あるとき淨土の和尚が、いふには、どう考て見ても、法華は佛になられぬといふ、法華のお上人腹をたて、法華經は諸經第一、何ゆゑにほとけに成られぬ、何ぞたしかな證據がある歎オオ證據がある、法華宗は、そろばんに懸らぬ故、佛にはなられぬといふ、上人ます／＼腹を

て、佛法が算盤にかゝるのかゝらぬのと、夫は、何のお経に出てあるぞ、イヤお経には出てなけれど、目の前そろばんにはかゝらぬ、其譯は、まづ釋迦如來の御命日は、二月の十五日、三十五日とそろばんはかゝる、淨土の元祖は、正月の廿五日、五廿五日と、算用が出来る、一向宗の開山は、霜月の廿八日、四七二十八日、と勘定が出来る、眞言の祖師は、三月の廿一日、三七二十一日と、そろばんにかゝる、其外聖一國師でも、また傳教大師でも、勘定の出来ぬはない、たゞ勘定の出来ぬのは、日蓮宗の祖師ぢや、二七十四では、一ツあまる、三四十二では、一ツたらぬ、どうしても、十三日の、御命日は、そろばんに、かゝらぬといはれた、甚味のある話でござります、畢竟勝ても負ても、罪にも、報にもならぬ、おなじ高根の月をみるのぢや、かやうに申すと十把一トからけ、胡椒丸のみと思しめさうが、左様ではござりませぬかた臂をはいでも、道理は、ちやんと、分つてある、めい／＼御宗旨を大切にまもり、人とせり合ぬやうに、いたしたいもので、ござります、たとへば男山も、劍菱も、諸白も並酒も、もとは一色の米ぢや、その趣意は、酒に酔ふのぢや、されども身分に上下が有て諸白で酔ふ人もあり、並酒で酔ふ人もあり、銘酒で酔ふ人もある、酔ふた味は同じ事ぢや、上酒に酔ふた人が、極樂の夢を見るでもなし、濁り酒に酔ふた人が地獄の夢をみるでもない、釋迦一佛より、

八宗九流とわかれたれど、つゞまる所は、人を善にみちびくのぢや、たとへどのやうに、有がたい宗旨でも、親に不孝、主に不忠、せけんの人に不義理をしては、極樂は思ひもよらず、先此世から、たすからぬ、當來の果をもつて、未來の因をしると申せば、どうぞ此世を安樂にくらしたら、極樂まるりは、疑ひはござりませぬ、此世の安樂は、いかがいたしたら、安樂に暮されませうぞ、チトおかんがへなされませ、忠孝より外に、安樂の道はござりませぬ、さてかの卯右衛門は、此日を始めとして、志大にあらたまり、口に稱名を絶さず、身に一寸の悪行もせずまことに前日の卯右衛門とは事替り、別の人のやうに、ござりました、是より馬士をやめ、農業を出精し、かりそめにも人とあらそはず、唯法義をよろこんで、無二の信者となられまして、しかるに卯右衛門の子、成人の、ち、嫁をむかへました、此嫁生得慳貪邪見にござりました、舅卯右衛門への、つかへかた、甚不孝にござりますれども、卯右衛門一言も、とがめませず、すべて是約束事とあきらめ、却てわが子をなだめ、嫁をそだて、日を送りまするにある時かの嫁が、舅の物のいひざま、おのが心かなはぬとて、庭にあり合ふ、横槌をとつて、舅へ投付ましたれば、かの横槌舅の額にあたつて、血はおびたしく、流れまする、息子はこれを見て、もはや勘忍なりがたし、親仁さまが何といはるゝとも、すみやかに追出さんと、女房

を引たて、門口へ出かけまするを、舅は大きにおどろき、隻手には流るゝ血を拭ひ、隻手にはわが子の袂をひきとめ、さま／＼にわび言すれば、是ほどの不孝もの、切きさんでもあきたらぬものを、何故におひ出す事を留さつしやると尋ねましたれば、されば夫ほどの不孝ものゆゑ追出すことを、留るのぢや、其わけは、此家でさへ、辛抱の出来ぬ嫁が、他へよめ入して、一日も辛抱が出来るもの歟、此家を追出すと嫁は片時も身を置ところがない、おれさへ辛抱すれば、なに事なうをさまる、此様に心得ちがひな嫁を、もらふたは、其方の不仕合せ、おれが宿業のわるいのぢや、何事も勘忍せよといひ宥めて、お佛だんに御明しをあげ、血をふきながら稱名を悦んでゐらるゝ、是を見て、さすがの嫁も、大に後悔し、ひたすらにあやまりますと亭主も漸く納得して無事にをさまりました、又あるとき、卯右衛門、嫁もろとも麥ばたけへゆき、畝をこしらへまするに、嫁は舅の先に立て、蹴つかひして、畝をけづり、舅は、あとより土をかけて通ります、然るに嫁のくはづかひあらく、畝ことの外、ゆがみまする故、舅は後より聲かけ、チト心得て蹴つかひを仕やれ、畝がゆがむぞといふ、嫁は元來短氣者なれば、これを聞と其ま、蹴を畑にうちつけ、ものをいはず、一さんに歸ります、舅はおどろき、これまた家に向け戻り、其ま、お佛だんへ御明をあげ、如來前に跪て、扱も地獄一定の、愚痴のお

やぢが、あさましい心より、嫁を吐りました故、嫁が腹を立ました、是全く、此親仁めが、わるうござりました、御ゆるされて下さりませと、くり返し／＼いふてゐらるゝ、是を聞いてさしもの嫁も、だまつても居られず、舅の側へ行、是はわたくしが了簡ちがひで、ござりました、勘忍して下さりませといへば、イヤ／＼そなたの悪いのではない、このぢいが愚痴なからぢやといふ、イエ／＼わたしがわるかつたといひ、終に嫁のきけんが直りました、是等の行狀、たび／＼ござりましたゆゑ、邪見の嫁も舅の信心に化せられ、いつし歟、我慢の角もをれて、後は孝行なる嫁に成ましたと、申す事ぢや、蓮如上人のお示しに、佛法は無我にて候へば、人にまけても、信をとるべしと、あるよし承はりました、何さま此卯右衛門は、實に我なしの行狀にて、よく法義をき、得たる信者と申す者でござります、是に引かへ、口に宗旨の意味をのべて、假初にも珠數をはなさないかにも後生願ひとみえたる人が、思ひの外に其所作を見ますれば、不足錢を拂ふたり、かりたるものをかへさなんだり、念佛題目となへながら、妾狂ひしたり、聲や嫁をいぢり出したり、つまらぬ信者がわるうすると、天竺にはあるものでござります、此様な信心は、みな引あてのある事で、畢竟神佛が、ものをおつしやらねばこそ、恥かしいことぢやござりませぬ歟、是について譬のはなしがござります、さる所に其日ぐらしの、困

窮な夫婦が有て、その女房が産の氣がつき、あやにく難産で、三疊敷をウん／＼いふて這まはる、常にとり上ばさまにも、醫者どのにも、無沙汰しておくゆる呼に往ても来てはくれず、亭主一人が打たり舞たり、さながら女房が苦しむを、よそに見てもをられず、さればとて我腹は痛もなし、詮方盡て、門口にある井戸へかゝつて。水汲あけ、二三ばいあたまからかゝり、合掌して、高聲に南無日頃念じたてまつる象頭山金びら大権現、たゞ今かゝが難産にてくるしみます、どうぞ恙なう出産をいたす様、お守りなされて下されい、もし出産したら、其お禮に銅の鳥居を、奉納いたしませうと、大聲でいふを、女房がもがきながら是を聞いて、コレめつたなことをいはつしやるな、ひよつと安産したら、銅の鳥居は、どうして工面さつしやるといへば、亭主は目顔手さきで、女房をおさへ、やかましくいふな、かういふてだましてゐるうちにチャット産でしまへといはれた、ナントおもしろい話でござりませうが、銘銘共も、神佛をだますとは思はねども、わるい事して極樂をねがひ、商賣不精で、金もちになりたいたいと、無理な事を神佛へいのは、わが本心をだましてゐるといふものぢや、我本心を欺すは、直に神佛をだますので、ござります、勿體ない事ぢや、罰の報のと申事は、小歌ぶしでござりませぬ、罰利生があればこそ、神佛は尊いのぢや、御用心なされませ、さてかの卯右衛

門、次第に年よります程ますます信心堅固の法義者になられました、ある年の冬姫路の町に同行がござりまして朝より其方へまゐりましたが、晝七ツ下り、いとまを乞して姫路の町を出、野道をとほとほ歸りまするに後より聲をかけて、呼者がある、ふり返つて見れば、隣村の馬士馬を牽て、卯右衛門に追つき、かねてをまへは信心者と聞たが、今夜わしが處で、お坐をつとめまする、大事なくば、初夜時分から、どうぞ參詣して下されといふ、卯右衛門大きによろこび、夫は近頃ありがたい事ぢや、左やうならお辭義なしに、參詣いたしましたせうと、約束を定めてわかれました、此馬士、元來心さまのよからぬ者なれば、よい心で申したのではござりませぬ、是は卯右衛門が、あまり法義を悦ぶと聞て、かた腹いたくおもひ、なぶつて見んと、今夜お坐があると偽て、出しぬいたのでござります、實は御坐も何もないのぢや、うまくと欺て、おのれが家に歸り、馬をあらひ、そこらかた付、初夜を相圖に火をふき消し、門の戸かたくしめて、寝いりました、卯右衛門は、かやうの事とはぞんじませず、わが家に歸つて後、刻限にも成りますれば、かの馬追のかたへ出かけます、折ふし暮すぎより雪つようふり、野風はけしく、一向顔出しもならぬほどの氣色でござりますれど、約そくを違へじと、簀笠をきて草鞋をはき、杖にすがつて、二十町ばかりの道を、お念佛をつれにして、寒さを凌ぎやう／＼

かの村にたどりつきまして、馬士の家にいたり、門の様子を見るに、甚靜にござります、やがて簀笠をぬぎ、門の戸をあけんとするにあかず、ほとくと戸を叩き、卯右衛門が参りました卯右衛門でござりますと、いへども叩けども音もせぬ、かの馬かたは寝ながら此聲を聞、さてはかの親仁めが、よほくと来たさうな、よもや今夜の雪には、つら出しは出来まいと思ふたに、さてもくかた意地な信心ぢやと、肝をつぶし、息をのんで、そら寢入して聞てみました、卯右衛門は、音信ても返事もなく、又もし火の影もみえませぬ、さては馬かた殿が、俄に用事でも、出来て、他所へゆかれたる歟、但しは刻限が違ふた歟何にもせよ、此ま、御目にかゝらずに歸つては、約束にそむぐ所もあれば、いざや此軒下にて、しばらく歸りをまたうと、簀笠うちしき、坐をしむれば、折ふし西風つよく雪吹きしりに身にかゝりますれば、竹の子笠を前にあて、しづかに念佛せられました、此とき野も山も、平一めんの銀世界と變じ、夜のふくるにしたがふて、寒氣身をさくやうに覺ますれば、思はず聲をあけて、さてもくかたじけなや、馬士どの、おかけで、今夜こゝへ来たればこそ、御開山の、北國御經回の、御苦勞のほど、萬分が一、思ひしられて、有がたいと、いよく信心いやましたれば、高らかに、念佛を悦ばれます聲彼馬士の耳に入て、身にしみくとこたえ、何となく尊く、ありがたく覺えましたれ

ば、今はたまりかねて、表の戸を引あげ、卯右衛門を内へ伴ひ、空寢入して欺きたる身の科をわびて、これより此馬かたも、志をあらため、終に同行となり、無二の信者となられました、蓮如上人のうたに

『火の中をわけても法をきくべきに雨かせ雪はもの、數かは』

卯右衛門の行狀此歌のころにかなひて、有がたいことござります、されば是等の始末、御領主様の御聞に達し、奇特の信者なりと、御感心遊ばされ、御褒美頂戴仰付られました、此時年六十五歳、なほ此餘ありがたき行狀、あまたござりますれども、事長ければ略いたします、すでに卯右衛門、去ぬる天保辰のとし、往生を遂られましたと、物がたりに承はりました、これ全く、佛法のをしへによつて、一文不通の卯右衛門が、よく人の道ををさめられました、専ら文字をしり、古事來歴をしるが學問ではござりませぬ、神儒佛の三教、何れなりとも、其根機にかなひたる教へを聞て、謹んでこれを守らば、人の道の勤まらぬと、いふことはござりませぬ、猶あとは明ばん、おはなし申ませう下座。

續々 鳩翁道話 貳之上

道は須臾も離るべからず、はなるべきは道にあらず、是故に君子は、其嗜ざるところを戒慎し
 み、その聞ざる所を恐おそる、これ則心を存し、性をやしなふの工夫にて、道は離れたうても
 はなれられぬと申す事を、おしめしなされたので、ござります、既に藤樹先生の語に、道は譬
 へば、水のごとし、人はたとへば魚のごとし、魚水にある時は悠然としたのしむ、水をはな
 る、ときははくるしむ、はなれて久しきときは死すと仰られました、何さま此通りで、人が人の
 道を、勤めてゐまするとたのしむ、人の道にはなれますと苦しい、人の道にはなれ通して居
 ますると、首くゝる歟、身をなけるか、切れるか、うち殺されるか、いづれ死します、これ魚
 と水とのやうなものぢや、人と道とは暫くも、離れることは成ませぬ、はなれたらしまひぢや、
 諺にも、合せものは、はなれると申す、人と道とは合せものではござりませぬ、道は性にし
 たがふの道で、うまれ付の通にするのが道ぢや、道の外に物なく、もの、外に道はござりませ

ぬ、又古人の説に心は道なり、道は天なりとも、みえまして、心をすれば道をしります、道を
 すれば天をしります、これをすれば、天人一致、萬物一體の道理がしれます、よし又この道理
 はしらないでも目を見る、耳はきく、手はもつ、足はゆく、譯を知らしめぬも、生れつきの
 道ぢやによつて、自由自在に出來ます、ある人の發句に

『子もふます枕もふますほとゝぎす』

おもしろい事ござります、郭公の聲が耳に入と、いつの間にやら立てゆき、窓を明る、しかも
 側にてゐる子もふます、また枕もふまぬ、何ものがあるいて往たぞ、只郭公ばかりぢや、
 チト考へて御らうじませ、ナント奇妙なものではござりませぬ歟、しかしながら身びいき身勝
 手が、少しでも交ると、枕もふめば親御のつむりも蹴ちらかす、こはいものぢや、さるによつ
 て朱文公も、道は日用事物、まさに行ふべきの理、みな性の徳にして、心にそなはると、註を
 お下しなされました、その心におれがといふ身勝手がまじると、性の徳をうしなひまして、朝
 から晩まで、する事なす事、工面のわるい事ばかり思ひ付て、我とわがてに、ハアスウいふて
 苦しみます、心學のありがたい事は、我なといふ道理を、合點いたしますれば、道のはなれ
 られぬ事を、よく知ります、大歟小歟の違ひはあれど得て身勝手がまじります、さるによつて、

平生道を辨まへて、おかねばなりません、事のないときは、道しつた人も、知らぬ人も、何もかはりはござりませぬ、何ぞ事があると、天地のちがひに成ます、たとへて申さば、私のやうな目くらも、あなたがたのやうな、目あきも、斯して居まする時には、何もかはりはござりませぬ、今にもあれ、ヤレ火事ぢや、盗人ぢやと、立騒ぐとき、あなた方は目があいてあるゆゑ、道をよう御存ぢや、ソコ怪我もせず逃られる私どもは、其段になると、逃る事が出来ませぬ目が見えねば道はしれぬ、されども、手足がござりまするゆゑ、さながらきより共してゐられず、探り廻つて逃ても、あちらでは、天窓うち、こちらではふみかぶり、どうやらこうやら、逃おふせると、始のうろたへた事は忘れて仕舞ひ、目を明うとも、道をしらうともおもはず、結構な目くらぢやと、思ふてゐる、道ざらひのお人は、私によう似たものぢや、事は何ときにおこらうやら、しれぬが浮世でござります、子が死なうやら、親が死なうやら、掛損せうやら、火事にあはふやら、其とき俄に、泣がほをせぬやう、前もつて道の修行はいたして置たいもので、ござります、是故に、君子は、其睹ざる處を戒しめ慎しみ、その聞ざるところを、恐おそると、事にのぞんで、泣づらさけぬ御用心を、聖賢君子は、前もつてなされまする、これに付て、たとへのはなしがある、さる所の隠居が、杖をついて板橋をわたるに、中

程の板にふし穴がござりました、かの隠居、杖をふし穴へ突入れた、思ひがけない事ゆゑ、是はと驚き、手をはなすと、杖はする／＼と、節あなより下へぬけて落ると、川下の方へ流れまする、隠居これを見て、ふしぎさうな顔つきして、腰にさいた扇をぬき出して、又かの節あなへさしこみ、手を放して見れば、扇も穴から、川へおちて、是も川下へながれます、隠居、つく／＼とうちながめて、やう／＼合點がいたやら、横手を打て、ハ、ア此理屈ぢやナといはれた、是がよう似た話ぢや、銘々どもは一べんや二へん、鼻ついて、天窓うつても、なんほうでも合點がゆかぬ、ソコで學問がきらひ、道のはなしが嫌ぢや、小人と君子とのわかち、外ではござりませぬ、しくじつても懲ぬのは、小人、しくじらぬ先に、御用心なされるのが、君子でござります、誰しも、おそれ慎む心のないものはなけれど、小人凡夫の悲しさには、人の見る所、人のきく處では、随分慎んで、用心をいたしますれど、人の見ぬ處、人の聞ぬ處では、どの様な事しても、大事ないと心得、高なしの氣隨氣ま、さるによつて折々鼻がへこみます、聖賢君子はこれに引かへ、人の見ぬところ、人の聞かぬところを、いよく大事とお慎みなされる、詩にいはいはく爾が室にあるをみれば、こひねがはくは屋漏にも愧ざらんと見えまして、君子は御一人ござつても、不行儀な事はなされぬ實に人の見聞ぬところは、い

たつて大事の曠の場所でございます、うろたへると、人にも見落され、大恥をか、ねばならぬ、中むかし、世の亂れまして、こゝかしこに、盜賊おこり、在方町かたおびやかされて一日もやすき心はござりませなんだ、其頃盜人二三人、夜ふけて、ある家を窺ひ、戸のすき間より、内をさしのぞいてみれば、としの頃、四十計の女、たゞ一人、圍爐裏の前にすわり、粥を煮て居ります様子ぢや、此外にも人があると、なほ窺て居ますうち彼女、粥のうえにえ加減を試る有さまをみれば、鍋のふたをとり、清らかなる箸にて、粥少し蓋の上にはさみ上、指にて押潰して試み、更に口中に入れませぬ、其行儀の正しいを見て盗大いに恐れて、にけ歸つたと、ある書物にみえました、是がこれ、獨を慎むの奇特でございます、私どもは、とかく合點がわるうて、これは人の見ぬ處ぢや、これは人の聞かぬ處ぢや、是程の事は大事あるまい此位な事はしれますまいと、我ひとり合點して道のない方へあたま突込、これが理屈ぢやあれがりくつぢや、是ではどうもならぬ、あれではどうもならぬ、かうすれば勝手がよい、斯せぬと勝手がわるいと滅多に身びいき、身勝手でこじつけ、心易う渡られる、世の中を、無理無體に苦しみます、ある人の歌に、「岩根ふみからたちわけてゆく人は、やすき大路を、すぎがてにする」と朝から晩まで、岨道を横ばひする、不行儀な蟹仲間が多い、さりとてはこまつたものぢ

や、其くせ人の横ばひするのは、よう目にか、つて、見事人の小言はいへど、おのれが横にあるのはトントめにか、りませぬ、又ある人の發句に「蟹を見て、氣のつく岨の清水かな」おもしろい句ぢやござりませぬ歟、此句を、我得かたに取て見れば、人の横ばひが目にか、つたらチャット、わが身にたちかへつて、我もよこ這はしてゐぬ歟と、氣をつけてごらうじませ、此氣がつくと、慎みの心がおこる、慎みの心が起れば、おのづから生つきの、性をやしなふ便になりす、もし少しでも慎しみがぬけると、離れられぬ道を、無理無體に離れるによつて、甚苦しい、此故に朱文公も、是をもつて君子は、常に敬畏を存じて、見きかずといへども、またあへてゆるがせにせず天理の本然を存じて、しばらくの間も、離れしめざるゆゑなりと、註をお下しなされました、すべて敬畏の心を存するは、人にむかふばかりの事ではござりませぬ、萬物に向ふに、此心をもつてむかへば、宜しうないといふことはござりませぬ、我友何がし、播州三草の人で、ござりするが、いたつて農業の事にはしく、米麥はいふに及ばず、何にても此人の手に植つけますと、豊凶にか、はらず、世間の人より作徳がたと有て、至極見事に出來ます、ふしぎにぞんじまして、そのゆゑを尋ましたれば、大きに謂れある事でございます、先初種は、随分よい種を撰んで前年より俵に入れ、庭の天井に釣おきます、これは

火氣が自然とまはつて、あたゝかなる様の心得でござります、尤所によつては、只土藏にたくはへておく所も、ござりますれど、北國筋や、あるひは山分などでは、多く寒氣が、つようござりまするゆゑ、火氣を假て、あたゝまりを安置する事ぢや、さて翌年にいたり、種附時分になりますれば、かの依をおろすに、竿のさきに鎌をゆひ付、下よりの釣繩を切ておとし、池水に漬ます事、廿日ばかり、其のち苗代へまきつけます、これが三草邊では、すべてかやうに致します、然るにわが友何がしの心得は、大にちがひまして、粗だねといへども天地生れの氣を、ふくんでゐる、活物なれば、疎略にあつかふときは、生々の氣をくじく事があらう歟と、いかにも大切に、つゝしんで、病人をあつかひまするやうに、しづかにかづき立て、つりおきます、又おろすときも、階子をかけ、ソット肩を入れて、繩をとき、靜におりて、池へもち行ときも、大事にして持ゆき、又水へおろすときも、小口から、ソロ／＼と少しづゝ水へひたし、次第に水へおろして、つけ置ます、上るときも、またはじめのやうにして、ソロ／＼と引上ます、是の心得は、人のあたまたより、水をかけますれば、一驚をくらひ、氣しゝまつて、暫はのびませぬ、足もとより次第に水をかけますと、胴ふるひも出ず、氣もしゝまらぬ、此理を考へてすべて種物をあつかふ事、大切の人をあつかふやうに、敬畏の心をそんじて

あつかひまする故、種ものゝ氣がおのづからしゝまらず、さるによつて、實のり格別、世間にくすぐれて出来るよし、咄されました、成ほど有がたい心得でござります、尤土地所により、又は寒暖によつてさまざま種漬つけなどの仕かたもござりませうけれど、只おそれ敬しむの心を主として、其所々の法にならひ、種漬つけ、すべてとり入まで、此敬畏の心で仕あけますればいづれ、世間よりは、餘計とねばならぬ筈でござります、是は種ものに限らず、茶碗ひとつ、扇一本、取あつかふにも、おそれつゝしむの心があれば、とり落してわる様な、無調法は出来ませぬ、まして主親に向ひ、夫兄にむかひ、此心があれば、忠孝貞節、おのづから勤まります、但し畏つゝしむといふて、ワナ／＼とふるひながら致す事ではござりませぬ、敬畏といふは、只大事大切とぞんじ詰ます事ではござります、別して、大事大切にせねばならぬは御鈴々の家業ぢや、この家業は、みな是其家々の、御先祖さまや、大祖父様親御の代から、仕來りの家業でござります、此家業をはじめるとは、一朝一夕のことぢやござりませぬ、鍵に血を付たり、鎧の袖をしきねにしたり、又は肩に棒を置たり、あるひは草鞋を作つたり、雨にそほぬれ、雪にうたれ、食ふものも得くはず、着物も得着ず、口をしい目も堪忍したり、難儀な事も辛抱したり、千辛萬苦して、この家業のもとるを御立なされたのぢや、その子孫として、

己が勝手の氣隨にまかせて、此仕事は引あはぬの、畑仕事はきらひぢやの、こんな小商しては渡世なる物歟など、とかく餘所外へ、目がついて、仕來りの家業が、いやになります、ソコデ百姓が商をし、商人が醫者になり、いろ／＼にばけて、世間の人をたぶらかす、恐ろしい事のござります、ヨウおもふて御らうじませ、引あはぬ商賣でも、埒のあかぬ細工でも、見事先祖代々、世渡が出来てきたのぢや、それが今更渡世にならぬといふは、皆これ、家業に精が出ぬのでござります、是を怠ると申します、此怠りの起る所は、身の分限を辨へませぬによつてぢや、分とは、士農工商それ／＼の分ち、限とは町人は是だけ、百姓はこれだけ、職人はこれ丈と、みな夫それに、住居衣類、食物は、申すにおよばず、身分だけの限りがござります、是を分限と申すのぢや、その分限を過す所から、物入がつようなり、入目が多いに付ては、金まうけが足らぬやうになります、ソコデ家業のこしがぬけて、おのづから精出して勤ることながらぬ故、トウ／＼先祖から仕來りの家業を取替るやうになります、こはい事ぢや、めい／＼身にたち歸て、慎しまねば成ませぬ、たま／＼據ない事で、家業をかへる人は、まことに止事を得ぬので、ござります、夫を手本にして、めつたに商賣をかへたがる人は、烏鵲の眞似をして水をのむと申すものでござります、こゝによい譬の話がある、さる貧地の和尚様が、急に餐

錢をしてやらうと考へ、有きたりの本尊、あみだ如來は古めかしく、世間に類も多し當時世間をうかゞふに専ら子をうむ事がはやる時節なれば、子安の觀音を本尊として、安産の守りを出したらば、寺門の繁昌うたがひなしと、俄にあみだを、觀音にしかへ、門前には、本尊子安の觀世音と、墨ぐろに書し、看板をかけたれば、參詣の人肝をつぶし、あやしんで門内へはいりませぬ、和尚大きに氣をいらつて、これではいかぬと、又々工夫し、其翌日は、辨才天、あるひは金びら、弘法大師と、おもひ出すまゝ、とり替引かへ、日々本尊を仕かへましたれば後には猫の子も來ぬやうに成たと申す事ぢや、商賣かへをしたがる人は、此和尚さまのお仲間うちぢや、先祖開山上人の御苦勞なされた、家業如來を、大切にお守をして、御先祖開山より傳來の家藏諸道具、鍋かまの御寶物をば、大切に守護して、一向一心に、家業如來を信心さへいたしますれば、參けいは門前に市をなし、賽錢は、米麥錢かね、雨のふるやうに、元日から大晦日まで、上り通しでござりまするに、此和尚さまのやうに、本尊を仕かへ、御開山の御苦勞をかへり見ず、不信心になるがさいご、參詣は日々にへり、賽錢は月々に減じ、仕かたがないうゆる、寶物をうり喰ひすると、本堂たちまち大破におよびます、其とき一家親るるへ、奉加帳を持ってまはつても、誰が一人、寄進につけてくれる者はない、是がこれ寺や本尊は、おれが

物ぢやとおもふ、和尚の心得ちがひで、寶物を賣らねばならぬやうに、成まするのぢや、是を孟子も、家必自らやぶつて而して後、人これを毀ると仰られました、とかく家業に怠つてはなりませぬ、ある人の道歌に『おこたりの夏のかせぎもほどく、ほにあらはれて、見ゆる秋の田』六月炎天に田はぶつくと、にえ返つてある中へ、四つばひに成て、腰ぎりはいり、脊はごらんで灸點おろさにや、分らぬやうに、眞黒に日にやけ汗しづくになつて、一番草、二ばんぐさ三番草と、ねんごろに手入した田も、またぶしやうがわいて、晝めしの箸はなすと永の日を、七つ時分まで晝寝して、のらくくと明しくらし、一ばん草もろくくにと取らぬ、田も青田のときは同じやうに見えますれど、秋になると、こはいものぢや、手入をした田は、實がついて皆俯てゐる、又のらかはいた田は、きよろりが、みそねぶつたやうに、ひよろくと、立てるまする、人の怠りも此通りで、平生は、格別おごつた様にも、あそんだやうにもおほえませぬ、昨日はこれほど怠つたり、けふは是ほど油斷が有たと、その折々はわかりもいたしませぬども、十二月の大晦日には、書出しはつんで山のごとく、胸つかへして、飯も喉へ通りませぬ、ひろけて見れば、皆それぐに覺のある事、此とき手を持って胸を打ても、モウおそい、是みな平生の油斷からぢや、とかくおこたらぬやうに、いたさねばなりません、かんざしは大事

歟、花見は大事此くらゐな事はしても大事ないとゆるす心の果ぞかなしぢや、所詮分限を辨へて、立歸らにや成ませぬ、かるがゆるに、中庸に、君子その位に素して行ふ、其外を願はずと、お示しなされたのでござります、これについて、おもしろいはなしがある、さる茶人の家へ、道具屋が参りました、モシ旦那この道具を御らうじませと、さし出せば、旦那が手に取て、ホンニ此茶わんは時代が見える、書付はない歟、誰が手づくねぢや、ハイこれは武藏坊辨慶が、手づくねの茶わんでござります、いかさま其時代と見える、代金は何程ぢや、ハイ三貫匁でござります、ヨシ、これは貰ふておかう、時にこの蓋置は、またよほど、時代がみえる、鼎足でもなし、また三人形でもなし、ハイこれは、むかし鴻門の會の節、樊噲が楯の板をはさんで、門やぶりました時の鎧のな物でござります、それはけしからぬ時代ものぢや、これも序に買ふておかう、時に此香合は、大分あたりしう見えるが、これは誰が作ぢや、ハイ、これは加藤清正、朝鮮征伐のとき、朝鮮王城の土をとつて、手づくねになされた香合でござります、それは一段おもしろい、これもついでに、買ふてをけ、いづれ近々、茶を出さねばならぬ、先辨慶の茶わん、樊噲の蓋おき、清正の香合、よい取合ぢや、しかしみな兵ぞろひぢや、是はどうした事ぢやと、問れたれば、茶道具屋がぬからぬ顔で、つよい筈でござります、たとと家を

ふみつぶして来た道具ちやといはれた、ナント恐ろしい話ではござりませぬ歟、茶碗や香合ばかりの事ぢやない、小間物やが持ってくる、仕入箱の中にも、朝比奈や辨慶が、本名をかくして櫛笄になつてゐようもせぬ、うろたへると、身代を、兵共にと、きつぶされます、其外古道具、古手見せ、質屋の藏に、つんであるしろものは、皆身代をふみ潰した兵、どこに埋伏して居ようもしれぬ、御油断は成ませぬ、とかく大事大切の慎みがぬけると、大騒動のもてるぢや御用心なされませ休息

續々鳩翁道話 貳之下

隠たるより見はるゝはなく、微よりあきらかなるはなし、かるがゆゑに君子は、その獨を慎む、前には敬畏のこゝろを存じて天命の性をやしなふの工夫を御しめしなされ、こゝには今一段くはしうして、省察の工夫を御しめしなされたのでござります、省とは常にこの心存するや、否やと省、察は、善歟、悪歟と、あきらかに辨へて、天命の性を全うすることとござり

ます、まづ本文に、隠たるより見るゝはなしとは、人の心の事を申すのでござります、又微より、顯なるはなしとは、念慮の微なる事を、いふのでござります、さて獨とは、われひとり、知るところの場所にて、すなはち念慮の、うごくところを、さして申すのぢや、大勢の人の中でも、わがこゝろの中は、誰もしらぬものゆゑさればこそ、ひとりとは申すれ、すべて、至善も極悪も、この我ひとり知るところの場で、極めますのぢや、多くはこれ世間の人の、不忠不孝におち入りますも、またいにしへ、夏の桀王、殷の紂王などの、天下を亂し、其身を亡しますも、はじめ僅に此ひとり知る、念慮の微なる所より、起るのでござります、たとへば螢ほどなる煙草の火より、大火事となるやうなものぢや、さるに依て、省察の工夫をこらし、つゝしみを加へねば成ませぬ、此獨をつゝしむ事、僅な事のやうにござりますれど、其しるしが、天地位し、萬物やしなはるゝに至ります、又この獨しるところを、うかくと油断しておきますと、其しるしが國を亡ぼし、家をやぶり、身をうしなふにいたるのぢや、ナント恐ろしいものではござりませぬ歟、古語に、念慮萌されば、鬼神も知る事なしといふて、此一念の萌さぬうちは、鬼神もはかり知る事が出来ませぬ、なぜなれば、知るべき事がないによつてござります、むかし飛驒の山中に、檜木の長へぎをこしらへ、世渡とする男がござりました

た、一日例のごとく、山に入て、細工をする折から、前なる杉の木の下に、春の高い山伏が、おもひがけなう、立て居ました、かの細工人大きにあやしみ、さても此山伏は、天狗さうなと思ふうち、かの山伏大聲あけて、我を天狗さうなとおもひをるぞといふ、細工人、いよくあやしみ、これはいやな事ぢや、早く逃歸らんとおもへば、かの山伏また聲をかけ、これはいやな事ぢや、早くにけ歸らんと、おもひおるぞといふ、細工人、あはて騒いで、長へぎをたはめ急に荷ごしらへするとき、手はづれて、枋板一まい、はづみに飛で、かの山伏の鼻柱へ、きびしくあたれば、山伏一驚をくらひ、さてくおのれは、氣のしれぬ男かなと、いふかと思へば、かき消すやうに失たと、ある書物に見えます、是かの天狗も、人の念慮のおこる所は、忽に知りますれど、慮念の起らぬさきに、長粉のはじけることは、夢にもしらぬ、これ知るべき道理がないに依てぢや、さるによつて、一念おこると、天地神明に通じ、世界中へ、つゝぬけに成まする、こゝを以て朱公文も、己ひとり知るときは、則これ天下の事、著見明顯なること、しかもこれに過たるもの有ることなしと、註をお下しなされました、さるに依て、常に腹のうちを吟味して、用心をいたしまするとどんな大事をひき出し、悪名を流さうやらしれませぬ、甚おそろしい事でござります、先年わたくし江戸表に居ましたる節隣家の事でござりまし

たが、ある呉服店の手代に、獨を慎しむ心得のない人がござりまして、いつの間にか、二十兩ばかり、引負が出来ました、されどもまだ節季までは、あらはれぬことゆゑ、とやかうと工面して居るうち、一日金二百兩の爲替手を持た、麴町邊まで、うけ取に往れました、先方で恙なう此金を受とりました所で、ふと悪念が起りました、恐いものぢや、其故は、いづれ節季になると、二十兩の引負があらはれて、請人へ預けられるは必定、所詮この金の手に入たこそ幸なれ、此ま、かけ落して、京大阪へなりとも出かけ、ともかくもならうと、無分別を考出した、これが是、物をかくせば隠されるものぢやと、心得ちがひする人の、所作ぢや、大切なものは、金銀、おそろしいものは、人の心ぢや、指一本はじく間に、どのやうな無分別がおこらうやらしれませぬ、若いお衆は別して戦々競々、こはしくのおつゝしみが、肝要でござります、さて此手代が、わがしこう工夫をして、此ま、逃なば追人のかゝる事は必定いづれ二三日、江戸の町にかゝりて、其のちに上方へのほらうと、覺悟をきはめ、日ざしを見れば、まだ晝前、何處でなりと、日を暮さうとおもひまして、よし町といふて、堺町の裏新道の、懇意の茶屋がござりました、先こゝへ逃込で、さてどうも仕様はなし、たいこ持やら、燈籠籠やら、高なしに大勢呼よせ、酒肴とどんちやんとで、日をくらさうと、ぞんじましたが、能うし

た物ぢや、本心が合點しをらぬ、酒はなんほ飲でも酔はず、太鼓三味線も面白からず、太鼓もちの、かる口も、胸にこたえてさり逆はこゝろぐるしく、首をのばして日ざしを見れば、まだ八つ前、いつもはみじかう覺る日も、けふに限つて、格別に長うおほえ、どうぞして日を暮したいものぢやと、さし俯て思案してゐる、ナントこれが鼻たれの時分から、おせわに成た、御主人の恩を、知た人でござりませう歟、恩をしらぬものを、人面獸心といふて、面は人でも、こゝろは獸ぢやといふてあれど、畜生にも此やうな不義な心はござりませぬ、わが友何がしといふ人、町分にて年寄役を勤めてゐられました、然るにこの町内に、何處から來たとも知らず、迷ひ犬が一疋居ましたが、いつしか町中の飼犬のやうに成て、こゝかしこでやしなはれて居ました、されば此犬が近頃往來の人をおどし子供に嚙付、あるひは非人などにかみつきました、折々町内へ、附こたへにあづかり迷惑すること度々でござりました、あるとき町用につき隣町へ、かの年寄相談にゆかれ、夜ふけて歸る處を、件の犬がさんくにおどしました、やうく我家へ逃こみ、寢て見ても、腹が立てねられず、翌朝會所へ髪を結に參られました、折ふしかの犬が、其會所の庭に寢て居ます、ソコ年寄が、にはかに氣色をかへ、犬にむかひて、人にいふ如く、おのれ町内のやしなひをうけ、命をつなぐ恩義もおもはず、やゝもす

れば、往來の人をそこなひ、町内へ迷惑を掛るのみ歟、夜前町用にて、夜ふけて隣町より歸る節、何ゆゑ町役人をおどしたるぞ、これによつて、以來町分にさしおくこと、罷ならぬ、いづれへなりとも立されと、大に叱りましたれば、かの犬、首をたれ、つくばひ居て、いかにもあやまり入たる體にみえました、さすがに年月、町内に居ました犬ゆゑ、不憫の心おこり、以來をきつとたしなみなば、これ迄のとほり、町分にさし置いてやらうと、詞が和らぎましたれば、かの犬うれし氣に表へ出した、髪結はじめ、家内の人、この様子を見て、大にあきれ、お年寄は氣が違ふたる歟と、怪みましたと申事ぢや、扱ふしぎなは、件の犬が、その日より、往來の人をおどさず、其うへ、かの年より、他へまるられます節は、かならず町ざかひまで送り、また歸る節は、町ざかひまで、出むかひまして、先にたつて、門口に踞りまする、畜生といへども、恩をしらぬといはれては、能々に恥るところありと見えまして、かやうに所作がかはりまする、これでおもへば主親の恩をしらぬものは、人面獸心とは、中々いはれぬ、畜生にもはるかに劣たる所作でござります、是全く、平生、獨をつゝしむの心が無い故、人の見ぬところ、人のきかぬ所と、わがてにゆるして、不忠不孝の所作になります、人は萬物の靈と申して、一切いきとしいけるもの、中において、尤すぐれたるが人ぢや、それに不忠不孝の名を取

まするは、實にはづかしい、口惜い事でござります、しかも不忠不孝の名をとつてせめて立身出世でも出来ることか、氣隨氣ま、がなる事歟、鳶鳥でも遊んでてはくれぬ、鼠もいたちも、分相應にかせがねば、口ずきは出来ぬ、若いときの無分別には、主親の手をはなされたれば、格別自由が、出来るもの、やうに覺えるは、これが血氣のムチャクチャ思案、乞食非人になつても、あそんでるてはくれはず、とても動きはたらくものなら主親のお膝もとで、忠孝がつとめたい物ぢや、うろたへると、本心が眞黒に成て、いつのまにやら獸ものにも劣る心になります、古歌に

『生茂るむぐらの宿の道たえて人もかよはず月もてらす』此歌のこゝろは、仁義の良心をうしなふて、人の道に離れては、生てる死人ぢやと、たとへてよんだ、歌と聞えます、斯様なお人は、澤山にあるものではなけれども、得て一人や二人は、あるものでござります、御用心をなされませ、扱かの手代どのが俯いてるを、氣のどくがり、ソロ／＼たいこもちが、おだてかけて、ナントこれから、芝居へ御出なされませぬ歟といへば、大勢の燈籠びんがわたしらもお供いたしませうと、とり／＼にすゝめる、ソコデかの手代が思案に、まだ日は暮す、酒飲でも酔はず、太鼓三味線もうるさく、たゞ何となく、しめつけらるゝやうにおもふ最中なれば

イツソ芝居見にいたらば、まぎれることも有う歟と、是から、大勢うちつれて、芝居見にゆくナニガ錢はらはぬ芝居行なれば、めつたに廣う様敷をどらせ、大勢の燈籠びんをまへにならば、其身は頬かぶり顔をかくし、後の方にもこまつて、もとより芝居見る氣でもなし、どうなとして日を暮さうと思ふゆゑ、見るでもなし、又見ぬでもなし、たゞウツ／＼として俯いてる、此日の狂言は、敵討つれの錦といふ狂言で、伊兵衛佐兵衛といふ、若黨がたがひに女房を賣て、金の才覺し、主人にやらうといふ趣向ぢや、尤伊兵衛の女房は、佐兵衛が妹で器量がよつて、銀五百五拾匁に身をうりまた佐兵衛の女房は、伊兵衛がいもうとで、不器量ゆゑ、錢一貫文で、身を賣る、愁歎の、ところをかの手代が聞ば伊兵衛の詞に、一貫の錢の、あたひは十二匁、世間通用の秤でかけたら、十二匁あるべきが、今日、この世界を、照さつしやる、天道の秤では、此見よが五百五拾匁の身の代もお縫が、其一貫の十二匁も、ちつともかるみはあるまいぞと、いふ聲が耳に入ると、かの手代がなにおもふたか、しく／＼と泣出したが、たまりかねて、何ともいはず、其座をたつて、一さんに主人の家へかけて戻りました。これ本心の發見、地ごくのかまのふたの明どき、ある人の發句に

『一しぐれ時雨もとの月夜かな』

ナントおもしろい發句ぢやござりませぬか、若いときの不了簡は、たとへば晴たる空の俄にかき曇つたやうなもので、善惡もわからず、主親の事もわすれ果、まよひにまよふて、つきあたつた所で、はじめて目のさめるは、一しぐれしぐれて、もとの月夜かなぢや、人の性は善なり、一旦明德は昏んだれど今芝居を見て、畢竟狂言綺語とはいひながら、勸善懲惡のをしへにちがひなければ、此手代どのが、見るとも見ぬともなしに、狂言の趣向が、身にしみごとく、こたえ能々おもふて見れば、かれはわづかな切米を、もらふた、主人の恩義に、女房を賣て、金の調達して、恩をおくらうと、おもふものさへあるに、我は幼少から、格別の大恩をうけて、人に成たことをうちわすれ、大切な主人の金を引負し、その上大金までぬすみ取て、出奔せうとおもふたは、われながら不思議なほど、恐ろしい了簡ぢやと、フト氣がついて見れば、座にもたまらず、叱られることも、引負のことも、何もかも思はれず、只そのまゝに、主人の家へ歸つたのでござります、實にありがたい目のさめ様ぢや、これは是狂言のおかけぢや、すべて芝居淨るり皆善をすゝめ、惡を懲す、手短かなをしへでござりますれど、得てはうまい處の身を喰すに、味ない皮ばかり給る人があるのぢや、狂言が上手ぢやの、男つきが立派なのと、やくにたゝぬ所ばかり、見て戻るは、かへつて毒にこそなれ、をしへにはならぬ、さる所にいた

つて實體な息子どのが有て、芝居などは、見たこともない篤實なうまれ付、ソコデ諺講の連中が、かの實體ものを、放蕩仲間へ引入やうと、一日無理無體に、芝居へつれて行きました、かの息子どの、はじめから終まで、一つく感心し、落涙して、よろこばれた、友だち衆が、此體を見てさては芝居が氣に入たとみえると、その後度々さそへども、ふたゝび芝居へは往ぬ、ソコデ友達衆が、合點がゆかず、かの息子殿に、此間はしきりに感心して、面白がつたぢやない歎、全體何を感じせられたのぢやと、問はれましたれば、かのむすこどのが、いはるゝには、ナンボウ渡世に、精出すといふても、六月炎天に、わた入を、三つ四つかさねて、飛だりはねたりの所作ごと、中々我々が、一日そろばんはじく様な、勤ではない、いかさまあれほど、渡世に精出さねば、身代はもたれぬものぢやと、それで感心いたしました、さるによつて、ふたたび芝居へ往たら、此方の身代がもてぬによつて、得參らぬといはれたと申す事ぢや、これは是芝居の、うまい身の所をたべたと申すものぢや、どなたも芝居を御らうじるなら、かやうなところを、御覽なさるがよい、むかし柳下惠といふ賢者は、水飴を製して、根氣をやしなひ、學問のたすけとせられた、又盗跖といふ大盗人は、みづ飴を製して戸樞にぬり、盗のたすけとしたと申す事ぢや、同じ水あめでも、もちるやうに依て、學問のたすけとも成り、又ぬすみの

たすけともなる、怖い物ぢや、芝居淨るりも此通りで、見様によつては、忠孝のをしへとなり、又見やうによつては、不忠不孝の二本ともなる、幸にこの手代衆の、よいところで、氣のついたは、いまだ天道にも捨られぬ處が、あつたとみえる、有がたい事ではござりませぬ歟、是ぢやによつて、専ら獨をつゝしむの修行をせねば成ませぬ、慎しむとは、一念のきざす時、良知の鏡をてらして、善歟悪歟を明らかにわきまへ、悪なればこれをやめにし、善なれば固くこれを執まするを、慎しむとは申します、このつゝしみが、癖付になつたを、聖賢君子と申すのぢや、何分常に、わが腹の中を吟味して、少しも恥かしくない様にしておくが、學問の肝要でござります、此ひとりをつゝしむと申すことは、道を行ふの極秘傳、かへすゝありがたい聖賢のお示しでござります、たとへば腹にかまれたるとき、出疵口をそいですつれば、たちまちに治るやうなもので、一念きざして、悪となつたら、チャットやめにすると、總身へ毒はまはらぬ、これを捨ておくと、其悪が、段々、腹の中で大きくなり、潜滋暗長といふて、目にはたらぬど、いつの間にやら心の悪が形にあらはれ、やめにしたうても、相人が出来て、やめられぬやうに成ます、吸がらの火は、ふみけしても仕舞舞るけれど、火事に成てからは、水も梯子もとゝかぬ、只一念機微の間に、善悪をえらんで、悪をやめにするが、道の奥儀でござります

ドウゾどなたも、こゝをお勤めなされて、下されませ、さてかの手代どの、主人の家には、今朝から爲替を取にやつたが、晝になつても戻らず、先方へ問合せにやれば、先刻手代どのへ、金子をわたしたとの事、サアこれから大騒ぎになり、請人を呼にやるやら、卜者に見てもらふやら、上を下へとまぜかへすところへ、七つ時分に、かの手代どのが、何氣ない體で、もどつて来た、此家の番頭どのが、いたつて發明なうまれ付ゆる、彼手代の戻るとき、其顔付をみれば、只ならぬ顔色、足もとを見れば、かたしくの雪駄をはいてゐる、しかもかたしは、絹眞田の緒の付た女雪駄、さては此奴、餘ほどうろたへたものと見える、何さま仔細あらんと、しづかに金子を問へば、別條なく、二百兩もち歸つて、番頭へわたします、ソコデ番頭がいはるるには、歸りの遅う成た仔細も、尋ねたけれど、何歟つかれたやうすにも見える、まづ二階へ上つて、一寝入ねよといはれた、かの手代も、これをしほに、二かいへ上つて、跡はともあれ、先金子を主人へわたしたれば、安堵して、氣をしづめました、此番頭の叱らぬはたらき、甚感心な事でござります、さてその夜、しづかにぎんみする處、引負の金子二十兩、有體に打あけ、なほまた、今日の不所存のこらす話し、其うへ伊兵衛佐兵衛の狂言で、氣がつき、恥をしので歸つたる様子、委細に咄しました上、いか様とおはからひ下されいと、實に誤り入た體で

ござりました、これによつて番頭どのが、主人へ委細に申したれば、主人も分別ある人にて、芝居狂言を見て、本心にたちもどりの出来るは、まだたしかなる所がある、雨ふつて地かたまると、此後吃度、あらたむるならば、今一度つかふてやれといはる、是からかの手代どのが、眞實主人の恩が有がたう成て、奉公を大切につとめ、難なく宿ばいりをしられたと申すことを承はりました、誠にあやうい事でござりまする、是で能う御合點なされませ、主親ほど世の中に、目の長い、慈悲ぶかいものはない、あまり結構すぎるによつて、さまざまの小言が起る、畢竟腹一ぱい物をたべて、ひだるい目をしらぬからちや、ある人の發句に

『その腹に何が不足ぞなく蛙』
 面白い句ちやござりませぬ歟、是は奉公人衆の事ばかりぢやない、所帯を持た、れきくの旦那さまも、皆入用のござります、猶あとは明晩おはなし申ませう下座

續々鳩翁道話 參之上

喜を哀樂のいまだ發せざる、これを中といふ、發して皆節にあたる、これを和といふ、中は天下の大本なり、和は天下の達道なり、これ即人の性と情との徳をいふて、道はしばらくも離れられぬと申事を、お示しなされたのでござります、畢竟性と情と、わけてはいへど、心の事ぢや、たとへば、性と情とは、水と波とのやうなものではなれたものではござりませぬ、風が來て、波のおこるときは、情の發したやうなものぢや、風止んで水しづかなるときは、性のやうなものぢや、波の外に水もなく、水のほかに波はない、人の性情も、これと同じ事で、所詮動靜の二つで、其實は一つでござります、この性情をかねて、心と申します、心の體は性なり、心の用は情なり、心は道なり、さればこそ性は道の體、情は道の用なりとも申てあるこれで見れば人と道とは、離たうても、はなれられるものではござりませぬ、さて此性を知らうと思は、喜びもせず、腹たてもせず、かなしみもせず、樂しみもせず、可愛がりもせず、惡みもせず、又ほしがりもせず、此七情の發らぬ先は、只何ともない物ぢや此何ともない所を性と申て、かたよりもせず、ゆがみもせぬ故、此徳を中と名づけます、此場所を見附たるを性をしつた人と申すのでござります、しかも見るといふて、何も見るらしいものはござりませぬ、しかれども、何もない性に、一切の理がふくんであつて能萬事に應じます、かるがゆるに中と

は、あたるとの儀とも申してござります、則これが天命の性、道の大本といふてあるのぢや、さて情をしらうとおもは、何ぞ喜ぶ歟、腹たてる歟、事のあるとき、主親は申すに及ばず、世間の人がこれを聞いて、かれが喜ぶは尤ぢや、腹たてるは道理ぢやと、得心して下さるのには則情の正しいのでござります、この徳を名づけて、和と申すのぢや、和はやはらぎむつまじい事で、人がみな合點してくれる故、和は天下の達道とも申してある、則情の正しいのは、世間へ通用して、差支へがないによつて、達道と申すのでござります、この味を、朱文公がおたとへなされて、ちやうど家のうちに人が居て、西へゆくのもなし、東へ行くでもない、何ともない所が性のやうなものぢや、さて東へゆくべきときは、東へゆきて、西へゆかず、南へ行べきときは南へゆきて、北へゆかぬが、情の正しいやうなものぢやと、仰られましたさて斯様に、性ぢやの、情ぢやの、心ぢやの、體ぢやの、用ぢやの、人心ぢやの、道心ぢやのと、申しならべて見ますると、女中がたや子供衆は、さだめて、御合點もまるるまい、また人の腹の中に、棚がいくつも釣つてあつて、それ／＼の品物が積である様にも聞えませう、けつして左やうではござりませぬ、畢竟何ともない物に、さまざまの名を付たのでござります、されば此道理は、しひて知らいでも、大事ござりませぬ、只今日しれた通をお勤めなされると、此理にかなひま

するのぢや、こゝによい譬の話がござります、さるかたに學問すきの人が有て毎日先生の方へかよはれましたが、ある日何歟、店でとぎ物をしてゐらるゝ、折ふし宿坊の和尚さまが、通りかゝつて、これは何をしてござるぞ、ハイ／＼とぎ物をいたしてをります、それは何をおとぎなさるのぢや、されば此ごろ、先生に、明德の玉を、さづかりましたが、先生の申されますは、これは是大切な玉ぢや、すて、おくと、くもりがかる、折々切瑳琢磨といふて、ときみがきをさつしやれと、申されました、然によつて、たゞ今明德の玉を、といて居まするのぢやと、いはれた、ソコデ和尚が、それは結構なものぢや、かねて聞た明德の玉歟、ドレ拜見いたさう、見せさつしやれと、手にとつてつく／＼見てイヤ／＼御亭主、これは明德の玉ではござらぬ我方でいふ、面向不背の玉といふものぢや、さても貴公は、仕合な人ぢや、随分この玉をしん／＼さつしやれ、中々明德の玉とは、天地の違ひぢやと、いはれました、亭主は合點せず、イヤ／＼それでもこれは、明德の玉にちがひはござりませぬと、せり合ふてゐるところへ、神主殿が來かゝつて、これは店さきで、何を争ふのぢや、ハイ私が明德の玉を磨いてゐますればこの和尚がそれはちがふ、面向不背の玉ぢやといはれますゆゑ、せり合ふてゐます、神主どのが聞いて、ドレ／＼おれが見きはめて進せう、見せさつしやれ、ハ、アみな違ふた、これは明

徳の玉でもなしたまた面向不背の玉でもないといへば、二人が口をそろへて、ソナナラ何の玉でござります、サレバこの玉は我方にいふ、まが玉といふ物ぢや、中々貴さまがたのいふ玉とはちがひますといへば、和尚がはら立て、ドレ見せさつしやれ、ヤツバリ面向不背の玉ぢや亭主氣をいらつて、其玉をひつたくり、イヤ〜明徳の玉にちがひはない、神主も目に角たてかの玉を又引たくり、ヤツバリまが玉に相違は無いと、たがひにせり合ひ、あつちへたくり、こつちへ取り、争ふうちに取おとして、玉はみちに碎けたれば、たゞ世界ばかりで、有たと申す事ぢやナント味のあるおもしろい話でござりませぬ歟、チトかんがへて御らうじませ、性ぢやの情ぢやの心ぢやのと、さまざまの名は付てあれど、其名を取てみれば、たゞ世界ばかり、何にもない、ある人の發句に

『踏くだけ氷の下に水もなし』

斯様に申ますると、それは無の見に落るのぢやと、思し召うが、落たうても、おちられるものではござりませぬ、何ぢやしらぬが、春になると花がさき、秋になれば紅葉する、柳は緑、花は紅、分別するほど、邪魔になる、柿の木に柿が出来る、桃の木には桃が出来る、鳶飛で天にいたり魚は淵にをどります、此うまい無造作な味をしらさうと聖賢君子が齒をくひしばつて

お示しなさるゝけれど、きよろりとして居るにはこまつた物ぢや、なまなかに分別が有て、東へ行べきときに、東へゆかすして、西へ行たがり、南へ行べきときに南へゆかす、とかく北へ行たがるこれが天命の性にさからひ、情がねぢれて、正しう發せぬ、ソコデ明てもくれても、せつない苦しいと顔をしがめて、泣あるくものがある、尤かやうな人は日本にありはいたしませぬ、唐天竺にはまゝこれに似た人があるものぢや、めつたに油断は成ませぬ、心學の有がたい事は名目をはなれて、たゞ何ともない、我なしのうまい所を見付まして、是にさからはぬやうにいたしまするゆゑ、分別せずして、おのづから樂になります、名を付て申しますれば性にしたがふ道が勤まるのぢや、さるによつて、無學文盲でも、随分修行が出来ます、よし又修行はせいでも、氣質のよいお人は、稽古せずして、人の道をおつとめなさる、畢竟銘々どもは氣質がわるいによつて、獅をつゝしむの稽古をいたさねばなりませぬと、全體は稽古せいでもどうせいでも、忠孝はつとまるやうに、うまれ付てをるのぢや、かるがゆるに、孟子も人の性は善なりと、仰られた、善なれば道に背かう筈はない、されども氣質の善惡によつて、修行をせねばなりませぬ、此事は前夜申したこととござります、幸ひに稽古なしに人の道をつとめた人がある、序におはなし申しませう、周防國吉城郡岩淵村と申しまするは、則長崎街道小郡

驛と宮市驛との間に、臺道村といふ、間の驛がござります、此驛より、岩淵村へは八町ばかりござりまして、すなはち街道筋にて、長門の國、萩の御領分でござります此岩淵村に關藏といふ百姓がござりました、女房もあり、高七石ばかりの作りをいたされました、しかるに此關藏病身にて、はかしく耕作も出来ませぬうへに、わづかの作徳なれば下作にあてますることもならず、もとより夫婦の中に子はござりませぬ、兄弟も大勢ござりましたれど、ことごとく死うせて、只今末の弟に、伊八と申す者たゞ一人残りしました、これによつて此伊八を、順養子にして、高七石を譲り、關藏夫婦は隠居同然になり、近村より嫁をもらひ受、伊八に娶合せ、農業を致させました、此嫁の名を、お石と申しました年十七歳にて、伊八が妻と成ました、此人後に孝貞の名、關西にきこえまして、太守様より御褒美頂戴いたされた人でござります古人の語に、人生れて、婦人の身となる事なけれ、百年の苦樂他人にまかすと、いかさま女は一たび夫の家へ嫁入すれば、身終るまで、夫にしたがふが道ぢや、さるによつて、其夫の心得次第で、かの氏なうて玉の輿にもり、さはなくとも、衣装に花をかざり、下女下男多くめしつかふやうにならうやら、またその夫の心得によつては、嫁入のとき、長刀をふらせて來た人も、貧苦かんにせまつて、身にはつづれをまとひ、味噌こしを提あるかうやら、百年の樂しみ

も苦しきも只亭主の、心得次第でござります、幸ひに皆さまは、お仕合がようて、結構なお暮しをなさるゝは、ひとへに夫の御恩でござります、得てわるうすると、この道理もしらず、こちらは貧乏人の娘ではなし、よめ入して難儀する筈はないと思ふてござる人があるものぢや、是はきつい、御了簡ちがひぢや、百貫目の身代も萬貫目の身代も、亭主の了簡が、ひとつくひ違ふと、たちまち、ちんからりり飯たかにやならぬ様になります、是ぢやによつて随分御亭主様を大事におかけなされませ、扱かのお石は、嫁入してより後、舅姑によくつかへまして、眞實の親のやうに介抱をいたされませ、そののみならず常に、夫伊八にしたがふて、農業のたすけをなし、其實體なる事、近所の人も目を驚かす程の事でござります、しかるにかの伊八といふは生得心さまのよからぬうへ、兄の家督を繼で、お石を娶りてより、いよく身持よろしからず、第一に農業をきらひ高七石の作りを、女房一人にうち任せ置て、その身は小商にかゝり、のみ酒屋をしては、人に賣るより、己がさきへ飲上てしまひ、古手屋をしては、博奕の算用に取りられ、菓子屋をしては、損をし豆腐屋でも損をし、其くせ短氣な生れ付で、かり初にも喧嘩口論、人のむすめに、疵付ては、ぐすりあるき、尤驛ちかいところなれば常に驛場に入ら、たゞのらくとして、明てもくれても、女房ばかり責せたけて、猿つかふ様に追廻し

日々困窮にせまる誠に氣毒千萬な悪黨ものでござります、これに依て、居村は申すにおよばず、隣村近村身ぶるひたて、厄病神の様におぢおそれ、實にもてあまして居ます、されどお石は、少しも恨まず、一言も口答へせず、千辛萬苦して、舅姑のはいはうと高七石の農業と、亭主のわる遣ひの尻ぬぐひに、日をおくること、およそ六ヶ年ばかりナントめづらしい、有がたい女中ではござりませぬか、是に付てをかしい話がございます、去る所の下女が、香の物鉢をとりおとして、割ましたれば、内儀が大聲をあけて、おりん何をわつたのぢや、ハイかうのもの鉢を取おとしまして大きに不調法でござりました、ナンヂヤ鉢をわつた、其鉢がおまへの二年や三ねんの、給銀で買もの躰、先度も大事の茶碗をわつて、又けふも鉢をわつてぢや、ソウ片端からわつて貰ふては、こちの身代は半季もつゝかぬとわめくを聞て、御亭主が、コレコレどうした物ぢや、そなたはとかく、仰山なもの、いひやうする世間體もわるいチトたしなましやれ、すべて女子といふものは何事もやさがたに、小さう取なしていふものぢや、おれが此間江戸から歸りがけに原の驛でとまつて、朝立しなに、草鞋をはきながら、テモ富士山は大きなものぢやと、いふたれば、宿屋の下女がいふには、イエ／＼、あのやうに、大きう見えませんが、半分は雪でござりますと、いふた、兎かく女子は、かうやさしう云たいものぢや、そ

ちがやうに、かりそめにも、仰山に物いふと、女子らしうなうて、聞えがわるい、以來チトたしなましやれと、叱ましたれば、内儀が頬ふくらして、其くらなる事、わたしぢやとて、知てゐますと、せり合てる處へ、懇意の人が見えて、これは八兵衛さん、此間江戸からお歸と承はりましたが、先御機嫌ようて、おめでたうござります、定めて長の道中、おつかれも有うと、ぞんじましたに、お見うけ申せば、能う肥てお歸なされたと、挨拶するのを、内儀が横合から出しやばつて、イエ／＼あの様に、ヨウこえて見えますのは、半分は垢でござりますと、いはれた、ナント出來のわるい内儀ではござりませぬ躰、得てわるうすると、コンナ女中があるものぢや、我身の恥になる事もしらずに、亭主のわる口を、近所合壁へいひまはる、鹿島のことふれ、山の神の御託宣には、こまり入たものでござります、おたがひに腹の中をさがして見て亭主のわる口をふれ歩行はせぬ躰、かしこまつて出しやばりはせぬ躰、頬べたをふくらして居はせぬ躰と、吟味するが肝要でござります、扱かのお石の親里は、相應に暮して居ますれば、これまで度々犁の伊八へ、金子も用立てやりましたれど、淵へ鹽を投込やうにて、何ほど入れ足してもやくにたゝず、其うへ娘が、艱難辛苦するを見て、親の心にはいかにも堪られずお石を呼にやり、二親が意見して、幸に子もなし、縁を切て歸れと申しますれど、よく心得たる女

にて、全く夫伊八の身持のわるいは、私のつかへやうの、能うないのでござります、いづれから申しても、麻につる、蓬とやらで、一方が直なれば、おのづからまつ直にならねば成ませぬ伊八どの、心得違の、直りませぬはヤツバリ、私のわるいのでござります、其上伊八どのほともあれ、舅姑御は、この上もないけつこうな二親ぢや、伊八どのがわるいと申て、ふり捨て歸られるものではござりませぬ、只此まゝに捨おかれて下さりませと、其志いたつて正しうござりますれば里の親たちも、せん方なくて、このまゝに捨置たら、後には困窮にせまり、縁切て歸ることもあらうと、これより後は、一向におとづれもせず、又無心もきかず、ひとへに困窮に迫るを、待てるられましたと申す事ぢや、詩には、桃の天々たる其葉藜々たり、この子こゝにとつぐ、其家人によろしと、見えました、こゝにとつぐといふてもあるは、嫁入る事のでござります、朱文公も、此註に、婦人嫁を謂て、歸といふとござりまして、よめ入して夫の家へのゆくのではござりませぬ、歸るのでござります、およそ女子は、一たび嫁しては、夫の家を家として、外に歸るべき家はない、されば此石女が親里へかへるまいといふは、歸るべき家がないによつてぢや、しかも此人學問をして、この道理をわきまへ歸るまいといふのではござりませぬ、發して節にあたる情の正しい處で、則天下の達道でござります、誰が聞ても尤と存

じまして、一言も點をうつ事は成ませぬ、其根元は、天命の性に率ひ、本心の指圖通りにしてござる故に、無筆文盲でも、かやうの動が出来ます、こゝを以て見れば、あながち學問をせねばならぬといふ計の事ではない、只本心にしたがへば、自から性情の徳があらはれ、忠臣孝子にもなれます、すべて父母のゆるしをうけて、夫の家にいたり、それから後に、さまざまの苦勞をするも、又結構な身になるも、皆天命ぢや、しかれば難儀こん窮にせまるといふても、天命の難儀困窮なれば、遁れんとすれども遁るべき道はござりませぬ、よし無理にのがれて、親里へ歸つても、同じ天地の間なれば、色しなかへて、また難儀困窮する、これが自然の道理でござります、百人に壹人は、夫を見すて、おや里へ歸り、また外へよめ入して結構な身になる人も、ないではないいされども此人、身は結構になつても心はかならず苦勞する事があるものぢや、夫にしたがふて道をまもれば、形は、苦勞すれども、心は安樂な、また道をそむいて、身は結構になつても、心の苦勞はたえぬ、ようした物ぢや、さてかの伊八は、次第に困窮の身と成ましたゆゑ一足とびのかね儲せんと、無分別をおこしまして、銀主をこしらへ多くのほうろくをやかせ船積にして、下の關へおくり利徳を得んと、やがて自分上乗をして、のり出しましたが、天のゆるさぬ所でござりました歟、海上にて難風に出合ひ、船は岩にあた

つて碎けほうろくは微塵になり、その身も海中におち入りましたが、どうやらかうやら、命たすかり、今一人の船頭も是もふしぎに危きをのがれて兩人ともにたすけ船にうち乗り、陸にあがりました、伊八は今さら在所へ歸る事もならず、終に其ま、いづくともなく、逐電いたしました、かの船頭在所へ歸つてこの事を物がたりしましたれば、關藏夫婦お石のかなしみ、申すまでもござりませぬ、しかるに在所中は伊八が逐電を聞いて、かへつてよろこび、疫病神をおくり出したやうに皆々安堵いたしたと申すことと申すことと申すこと、この伊八が行状は、天命の性にさからひ、なす所の所作一つとして悪事ならぬ事は、ござりませぬ、これその情の乖戾するとて、ねぢれましたのぢや、去によつて、人みなこれを忌悪み、五尺の身のおき所のないやうに成ました、これぢやによつて、戒心恐れし、獨をつゝしむの修行をいたして、どうぞお互に人の道をなれぬ様の用心が、肝要でござります 休息

續々鳩翁道話 卷の下

中和を致して、天地位し、萬物育はると、これ則戒慎恐懼、ひとりをつゝしむの功によつて小人も聖人の域にいたり、其徳天地と合して、萬物を生育す、所謂天人一致、萬物一體の理を、おしめしなされたのでござります、畢竟中とは、天命の性をいひ、和とは性にしたがふの道といふ、致とは、修行して推極るのぢや、平たういへば、本心の通りにして、少しも背かぬ事とござります、大きいふと國天下もをさまり、小さいいへば、一家一身もをさまる、有がたいことぢや、天地位すとは、聖人國を治めたまふ時は、雨風時にしたがひ、天は天の徳をあらはし、地は地の徳があらはれます、また一家でいへば、親の親のやうになり、夫は夫のやうになるのぢや、萬物やしなはるのぢや、萬物やしなはるゝとは、五風十雨、ときにしたがへば、人は申すにおよばず、米も麥もよう出来、鳥獸も其所を得て、おのれが生を遂ます、一家で、申さば、家内の諸道具鍋かままで、質屋の藏へもはいらず、道具屋の店へも出ず、おのゝ其所を得て、その役をつとめます、これがこれ、その本心にしたがふ歟、率がはぬ歟、この二ツのさかひで、天地位し、萬物やしなはるゝと、親子兄弟、はなれゝゝになるとの、二ツに成ます、ナントこはいものではござりませぬ歟、その本は暗ざる所をいましめ慎しみ、聞ざる所を恐懼れ、わるい分別はおこりはせぬ歟、と腹のうちを、吟味する、獨をつゝしむ工夫の、出来不出

來によりまする、この道理を合點して、おこたりなう、勤めるが、學問の極功、聖人の能事も、この外にあるのではござりませぬ、どうぞ本心におしたがひなされ、精出してお勤めなされませ、ある人の歌に

『あすもまた朝とく起つとめばや、窓にうれしき有明の月』

わが心學の得方にとつて見ますれば、味のある面しろい歌でござります、チト考てごらうじませ、さてかのお石が親里には、折もあらば、むすめを取かへさうと、考へて居ました所に、幸このたび、伊八が逐電したと聞付ましたゆゑ、よい縁の切所と早速に娘をよびよせ、すみやかに離縁してもどつて来い、もし此度も縁をきらず、親の詞に背かば、餘儀なう勘當せねばならぬと、おどしかけて責ますれば、お石は、興のさめたる顔にて、御勘當はかなしけれども、夫伊八のゆく衛、しれませねば、誰にことわつて縁を切て、歸りませうぞ、何事も私の不運、今更里へかへりましては、舅姑御の介抱は、何人が致しまするぞ、これからが嫁の入用、身を粉にくだいてなりとも、夫伊八と二人まへの孝行は、私にせねばなりません、お詞をそむきまするは、不孝なれども、此儀は御ゆるされて下さりませと、中々承知するけしきもなく、これより終に親里と手切れになりました、此としお石廿二歳、ナントめづらしい、有がたい、女中で

はござりませぬか、人の親のこゝろは闇にあらねども、子をおもふ道にまよふて、世間にはこれに似た無法な事をいふて、娘に縁をきらす、親達があるものでござります、子もまたうろたえて、親のことばにつき義理も法もうち忘れて縁をきつてもどる上に、猶へらす口をたいて親の詞を背かぬが、子たる者の孝行ぢやなど、利口にいつて居る人がある、氣毒なものぢや、孝經には父に争ふ子あるときは、則身不義に陥らすかるがゆゑに、不義にあつては、子もつて父に争はずんばあるべからずと見えます、今お石が父母に争ひ、勘氣をうけても、伊八と縁を切ませぬが、則父母を不義におとし入れぬと、申のでござります、しかもお石が孝經をよく習ふた人でもなく、又學者でもござりませぬ、しかれども其本心の正しきを守るときは、發して節にあたる、天下の達道、これが中和をいたすと、申すものでござります、これよりお石は手ひとつにて、舅姑につかへ、専ら農業を勉まする、しかるに天性、顔かたち見ぐるしからず、ことに年も若ければ、居村は申すに及ばず、隣村の悪少年ども、其獨身なるを見あなどり、とかくいひよるものも、多くござりますけれど、お石もとより、鐵石の志にて、髪に油をもちるす、衣類は膝を過す、然もまた行儀正しく、人にあふて甚感歎にござりますれば、これに恥て後々はいひよる者もなく、却てその行狀の正しいを、譽る様になりました、成ほど行儀は大事

のものでござります、たとへば、綺麗に掃除して、水うつて、チャント掃ちぎつてある處へは、塵芥を捨に来る人はない、皆此方の仕向ちや、せけんにも埒もない事の出来るのは、みなムシヤクシヤと、行儀がたぬによつて、さま／＼の塵芥を持つける、こはいものぢや、御用心なされませ、ある人のうたに

『汲てしれこゝろのその井をふかみすむもにござるも我ならぬかは』

さてその翌年の年貢を、滞なくをさめました、翌年にいたり、舅關藏かりそめの煩より、つひに腰ぬけとなりました、かばかりのわづらひゆる、藥代は勿論、諸入用も多く、成ますればしうとめに介抱を、たのみ置て、其身はいよく、辛苦して、農業をつとめました、何さま世の中に不仕合な人も多けれど、中にもお石は格別に不仕合にて、其翌年また姑も、同じく腰ぬけと成ました、是によつて高七石の作りも出来ぬやうに成ますゆる、村役人へゆきて委細をばなし、御大切の御田地なれば、若未進等も出来ましては、申し譯がござりませぬ、何卒お預り下されいと、段々とたのみましたゆゑ村役人も尤にぞんじまして、やがて下作へ預けてくれしました、お石はこれより僅なる作間をもらひ、晝夜兩親の介抱にかゝりまして、物半日と出あるくことは出来ませぬ、やう／＼半道一里の使をつとめ、又は臺道村へ出まして少しづつ、の小場

にやとはれ、家にあるときは、兩親を左右へねさせて、其身はまん中にて、草履わらぢをつくり、世わたりの助に致ますれど、女の手業といひ、殊によこれ物のすゝぎせんたく、介抱に手がひけまする故、はか／＼しきはたらきも、出来ませぬ、さるによつて次第に困窮にせまり、朝夕のたべものさへ、漸く兩親へ、粥をすゝめする位の事ゆる、其身はたべるふりして、給ぬ日もあり／＼はござりましたと申す事ぢや、されども猶不自由なる體は見せず、かい／＼しく介抱する事、すべて十一年の間、其こゝろざしいよく、かたく、少しも弱りたるけしきはみえませぬ、まことに有がたい女中ござります、子のたまはく歳寒して、而後、松栢の凋むに後る、事をすると、論語に見えまして、君子も小人も、事のない時は別に變た様子もみえませぬ、困窮にせまる歟、事の變に出合ふたときは、小人の悲しさには、利慾にまなごがらむゆる、手あしをはつてうろたえまする、君子の所作は、かやうのときにあたつては、いよく静にして、少しも騒ぐことはござりませぬ、たとへば冬に成て、木がらしのふく時分には、草も木も色かはり、葉もおちて、其姿ともみえませぬ、然れども其中に、松や栢は、なほみどりの色を失ひませぬ、これと同じこと、お石が此とし頃の行狀實に此場所ござります、さてある日、お石くれ方より、人足に雇はれましたが、心いそがはしく、道をせいたれども、餘

儀なき用事にて、少し暇どり、其夜四ツ時分に歸りました、いつも門口より聲をかけますれば内よりも返事する、しかるに今夜に限りて返事もなし、これはいかにと内に入て見れば、両親はさめんと泣てござる、扱は何ぞお氣にいらぬ事が、有た歟、私の歸りがおそい故に、お案じてござりましたかと、しきりに問へば、両親の泣たいはるゝには、我等夫婦いかなる宿業にや、伊八の不所存ゆゑ、困きうにせまり、其上二人とも業病に取あひ、此とし月そなた一人の介抱で、けふまでは命をつないだが、今よひそなたの歸りのおそいゆゑ、もしや我々夫婦をすて、親里へ歸た歟と、いふ疑の心が起るにつけ、よく思へば、此年ごろの艱難辛苦、中眞實のむすめでも、是ほどに介抱は、とゞきはせまい、されども、永の年月の事なれば、退屈の心のおこるのも、無理ではない、去ながら其方が歸てくれねば、あすより我等夫婦は乞食もならず、立どころに餓て死ぬると思へば、たゞ何となく物がなしく成て、おもはずもなきましたが、能う戻つて来てくれたと、又うれしなきに、さめんと泣れました、お石はきの毒さいふばかりけれど、わざと打わらひ、今夜は餘儀なき用事にて、すこし道で暇どりましたのぢや、たとひ此後いかほど歸りが遅いととも、必心よわい事をおほしめすな、我身は死でもこゝろは死なぬ、いつまでも御介抱申して、御先途を見とゞけます、くれぐれも心づよう思し

めせと、とかくいひなぐさめて、くすりなどあたため、例のごとく両親の真中にて、はなししながら、草鞋をつくる、程なく夜も更がたに成ましたれば、とくやすめと両親のいはるゝ、故うすき裕やうのもの引かつぎて、其まゝそこに寝いりました、ある人の發句に

『我が身に秋かぜ寒し親二人』

ナント哀な句ではござりませぬ歟、チトかみみて御らうじませ、扱關藏夫婦は背のつかれにト寝いり、ね入りましたが、ふと目をさましてみれば、お石がしくくと聲もたてず、しめ泣に泣てるる故、大に驚き、何故ぞと問へば、寝て見ても、目があひませぬといふ、それは何ゆゑぞと頻にとへば、されば伊八どの、家を出られてより、すでに六年、里の親たちよりは、縁を切て歸れかした、度々申されませぬ、もとより歸るべき志はござりませぬ、夫のみならず御大病の、ちは、なほさら側を離れてはならぬと、心一ぱい御介抱申すれど、折々の雇はれ仕事に、手がひけまして、十分に御介抱のとゞきませぬは、まだ私の盡さぬ所があるによつて親里へ歸つたかと、お疑ひもおこります、これ全く私のとゞかぬのでござります、どうしたら御安心に成ませうと思へば、寝ても寝入られませぬと、いひわけする、詞のうちに、少しも舅姑を恨まする心もなく、たゞわが身の足らはぬを歎きます、眞實がみえますれば、關

藏夫婦も大に氣の毒に思ひとやかくといひなくさめ、其夜はやうく、やすみました、實に此一條、一點も父母をうらむ心なく、たゞおのれが身をくやみするは、實に難有志ようわが身に立かへつたものでござります、孟子に所謂行得ざることをあれば、皆かへつて是を、おのれにもとむると、見えましたるもこれらの事で、ござりませう歟、されば此翌日より雇はれ仕事、かたくことわり、只兩親の側をはなれず、近隣の人をたのんで、わづかなる賃仕事を請とり、其日の煙をたてます、其艱難困窮筆にも詞にもつくされる事ではござりませぬ、あるとき隣の人が来て、關藏へ申しますには、此ごろ隣村へ、京都御本山より、御使僧が御下向なされて、ありがたい御勸化がある、ドウゾならう事なら、參詣をさつしやらぬ歟とす、めました、關藏もうちうなづいていかさま伊八か居ました時分は、隱居同前の事ゆゑ、をりくは御法座へも出ましたが今不自由なからだに成ては、それさへおもふ様になりませぬと、いふをお石が聞いて、左様の思し召ならば、とくにもお供いたしましたませうものを、氣のつかぬ事でござりました、あすともいはず、善はいそげちや、今日おともいたしませうといふ、關藏も大によろこび、さらば御法談を、久しぶりで聴聞しませうと、その用意におよびました、則御法談のある、隣村へは、およそ道一里あまり、しかるをお石は、かの舅關藏を脊におひ、姑にしばらく

留守をたのみ、やがてお迎ひにまゐりますると、帯やうのものにて、小兒を負たるごとく、舅をおひ、一里あまりの所を女の身にて、かひなくしく通ひます、尤其道に川もあり橋もあり、とかくして寺へのゆきつき、講中をたのみ、かの舅をおろし、堂の隅に、寒からぬやうに、こしらへおきて、是よりまた引返して、家に歸り姑を脊に負ひ、隣へ留守を頼み置てふたゝび、寺へたち歸り、講中へあつく禮をのべ、舅姑の二便の世話などし、其身は側にあつてなでさすりしながら、御法儀を聴聞する、さて法話をはれば、講中へ姑をたのみ置て、まづ舅をはじめの如くに負ふて、道をいそぎて、家に歸り舅をおろしてねさせおき、また寺へ姑をむかひに来て、脊に負て、講中に禮をのべ、一さんに家に歸る、すべて一座の法話を聴聞するに舅姑を負ふて、一里餘の通を往來都合六たびにおよぶ、しかも一日の事ではござりませぬ、法座日限の間、雨の日も風の日も、一日も怠ることなき孝順の行状、見る人驚歎せぬものは、ござりませぬ、されば後々は參詣の人、お石が至孝の志を憐みまして、多くは、姑を負ふて、お石が勞をたすくる人もござりましたと承はります、猶また人の間をおどろかしましたるは、かの法座を勤られし僧、お石が日々奇特の參詣を感じ、講頭植田何某といふ人にくわしくその來由をたづねまして、名所を書しるし、法座をはつて後、歸京いたされ、此よし御本山の御聞に達

しましたる所、御感賞のあまりお石へ結構の御菓子一折、關藏夫婦へ法名を下しおかれ、これを捧持して、翌年また、かの地へ御使僧御下向に成相り、法座はじまりし所、如例お石舅、姑を負ふて参詣に及ましたる故、やがて御命のおもむき申しきかせ、右下されもの頂戴仰せつけられましたるは、實にありがたき仕合、これひとへに至孝貞節の徳と、隣國まで傳へ聞てうらやまぬ人はないと承ました、さればこれらの始末、終に大守様の御聞に達し、やがて御近臣柳井何がしといふ士に、仰付られ、かの地へたち越え、とくと相糺きたるやうとの御命が下りました、さるによつて、柳井氏、即刻小郡驛へ、發行せられまする、道中すぢ、驛々にて繼立の人足に、かならずお石が事をたづね問はれますれば、皆こたへてたゞ一口に奇妙な人ぢやと申します、いかさま遠國邊鄙のこゝろなき、あらくれたる、人足衆も、此お石が行、状を、見聞してはわるいと、さすがに思はず、然れども、何と譽てよいやら、譽やうがないによつて、只奇妙な人ぢやと申しますは、尤の事でござります、實に又金玉の詞をつらねて譽たりとも、萬が一にもおよびませぬ、所詮言句におよぶところではござりませぬ、人足衆の口々に奇妙な人ぢやと申しますは、實に的當の譽やうでござります、さて柳井氏、小郡驛にいたり、植田何某を召て、委細にたづねられしところ、聞しにまさる行、状なれば、早速立かへつ

て、此段言上に及びますれば太守様ことの外感じ思し召れ、關藏夫婦へは生涯二人扶持を下しおかれ猶またお石は、萩の御城下へめしよせられ、御目見仰付られ、御惡命を蒙られしは、實に冥加言極の事ども、身をたて道をおこなひ、名を後世に揚てもつて、父母をあらはすと、これらの事でござりませう歎、さてこゝに奇特なる事は、岩淵村の人は、申すにおよばず、近村こそつて、はじめ疫病神のごとく、おぢ恐れ、毛むしの如くに、いやがつた、伊八を、この兩三年前より、そろく其のく衛を尋るやうに成ましたと申す事ぢや、其故はお石一人が、身心を碎て、舅、姑につかへます、行状を見るに付ては、せめて、伊八が、家にあつて、少しは手助けをする物ならば、さぞかしお石もよろこぶであらうと、おもう心より、人々いひ合さねども、小郡驛へ、人足に出る度毎にかならず往來の人について、伊八が人相骨柄をはなして、かやうの人をば、見あたり給はぬ歎など、あてなしに、尋ましたるところ、ふしぎに長崎にゐるといふ事を聞出しやがて村中の人申あはせ一兩人伊八をむかひに、長崎へ参りました、これ全く、お石が孝貞、人をして感せしむるところより、忌きらひし者を、はるく、迎ひに参るやうに成ます、さりとては孝行の徳は、廣大なものでござります、扱長さきへいたり、難なく伊八にめぐり逢まして、在所へ歸れと申すれば、伊八中々聞いれず、所詮かね備せねば

在所へは歸られぬといふ、かの迎ひに來りし人、委細にお石が孝行節儀を、咄しまして、借錢はともあれ、すみやかに在所へ歸つて、お石が志を助けよと、申ますれば、伊八これを聞て大に驚き、まだお石は居まする歟といふ、居りまする所ではない、その孝順のありさま、見て居られぬ故、貴様をむかひに來たのぢやと、無理に引たて、在所へ歸りましたる所、在所中、大騒ぎの最中、何事ぞと問へば、只今秋の御屋形より、お石が御褒美を項戴して戻つた所ぢやといふ、さしもの伊八これを聞て、腸をあらふごとく、懺悔後悔してこれより本心にたち返つて、よい人になられたと申すことぢや、是ひとへに、お石の孝徳他に及んで、此奇特があるのでござります、徳孤ならず必 隣ありの聖語、今さらおもひあたつて、驚くばかりの事でございます、されば此事隣國遠境に聞えまして、小郡驛御通行の御歴々さまがた、御本陣へお石をめされて、御目見仰付られ、御銀おびたしく、下し給はる事、度たびとうけ給りました、中にも奇特に覺えましたるは、小野何がしといふ人、お石がことを傳へ聞て、十四歳になる娘をつれて、はるく岩淵村に尋ねきたり、お石に對面におよばれしとき、かのむすめのみよまれたる歌として、

『立よりてしばし成ともならは、や、おやにつかふる人の心を』

ナントやさしい志ではござりませぬ歟、習ふてよいものは忠臣孝子の心、習はいでも大事なものが、髪のかざりや衣裳の端手ぢや、すべてお石が此十一ヶ年の行狀、よそから習ふて、來たのではない、性にしたがふの道を、盡したのでござります、此性お石にばかり、あるのではない、お互に具はつてある、生れつきの心ぢや、さるによつて、今にもあれ、志を起して勤るときは、誰しも出來ぬ人はござりませぬ、忠孝の出來ぬといふのは、出來ぬのではない、せぬのぢや、子曰はく、仁遠からんや、吾仁を欲すれば、仁に仁いたると、仁は善の總、心の全徳、物を愛するの理、孝行忠義は、直に仁ぢや、仁其ま、人の性ぢや、性則うまれつきの心といふ事ぢや、されば孝行忠義を、勤めようと思ふと、何ときでも勤まるものぢや、此結構な本心を持たながら、うろくとして、一生を終るは、口をしいことではござりませぬ歟、これについて、よう似たはなしがござります、山家からはじめて京へ、奉公に出た下女が、夜になれば、行燈をとすといふ事をしらす、内儀のさし圖で、暮がたに行燈に火はともしたが、只手にさけて、うろくと臺所や座敷を、持まはつてゐる、内儀が見つけて、ナゼ臺所におかぬのぢやと叱たれば、下女ぬからぬ顔で、もし闇がりに置ても、大事ござりませぬかと、いはれた、ナント味のあるはなしぢやない歟、どうぞ一たび、本心の明りを見しつておいて、自由自在に、

くらがりを照す様に、いたしたいものでござります、朱文公觀書の詩に「半畝の方塘一鏡開く、天光雲影共に徘徊す、渠に問ふ那んど清きこと許の如くなるを得たる、源頭活水有て來るが爲なり」、チト御かんがへなさりませ、下座

續々鳩翁道話終

索引

赤子のたとへ	二〇三	色のわな	二九
赤裸になりて借金をすまず	二三	隠居の咄	二五
争を教ゆる理由	五	隠通せば行末如何	四七
ありがたい目のつけ所	八七	ウ	
安心ならぬが浮世		牛と馬の間答	六五
		乳母の慈悲禽獸に及ぶ	一七二
イ		エ	
息杖と旦那の心	一一四	江戸屋といふ百姓の咄	一六三
一字千金	一一一	オ・ヲ	
いつぱりのなき世なりけり	二三九	大阪の大火	一一
今の學問の弊	一五	大阪は渡世し易き土地か	五九
色々の氣質で家が始る	一八〇		
索引			

翁の講談
 奢のわな
 奢は馴れ易きもの
 奢は不仁の本
 おさんどんと丁稚
 おそろしいものは金
 恐ろしい話
 丈夫も及ばぬ志
 親の苦樂は子の所作にある
 おれが／＼の妄念
 おれが／＼は頼にならぬ
 「おれが」は了簡違ひ
 可愛く／＼で育てた誤り
 孝子の西國順禮
 孝子薪賣長五郎

カ

二八
 三三
 三六
 一八
 一〇五
 一一八
 一三二
 一六九
 一七一
 一七〇
 八六
 一八三
 四〇
 三

孝子茂八
 孝は人の天性
 鏡を知らぬ人のほなし
 隠れたるより見はるるほなし
 賢いやうでも愚かなもの
 貸雪隠
 蟹を見て氣のつく蛆の清水かな
 金が敵
 からだの世話、心の世話
 肝癪持の萬兵衛
 堪忍の強き六介
 堪忍は一つづつ
 堪辨者の咄
 氣が合はれば家内は不和
 樵夫の話

キ

三九
 四〇
 一六六
 一四一
 一二六
 一二八
 二五九
 一五一
 一〇七
 一〇七
 六七
 七〇
 七一
 五〇五
 一八一
 三八

ク

きせるのたとへ
 奇特なる信者の咄
 氣の短い亭主
 京の蛙と大阪の蛙
 兄弟づれの旅
 拱把の桐梓
 清水寺の繪馬
 寓言國
 愚なる男
 黒き毒蛇
 關東の洪水
 君子の困窮
 鶏犬のたとへ

ケ

二三〇
 二四三
 一七八
 八五
 五一
 一二五
 一九八
 四九
 五〇
 一四〇
 二二
 一九三
 九〇

稽古なしに人の道をつとめた百姓
 下女の咄
 殿家の子は殿を知らず
 儉約の教訓
 儉約の序
 儉約は常のこと
 儉約は吝き事に非ず
 元亨利貞
 強欲者の競争
 ここが入用の所
 極樂見物の咄
 御勸化の聲
 志あるものは成る
 心の洗ひ方
 心の關

コ

二八四
 三〇三
 一八三
 四
 一六
 一七
 二二五
 一二八
 一二六
 二〇九
 二四三
 一六四
 一九六
 一八八

索引

心の洗濯が大事 一八一
 心の番 一九〇
 心のまがり 一〇五
 心は主人、身は家來 一二六
 乞食仲間の顔よこし 五六
 小鳥のたとへ 二〇七
 吳服渡世の老夫婦 一五七
 吳服屋の手代 二六九
 こまかいほこりをとる分別 一七八
 固有の心 一七五
 金米糠をつかんだ咄 一八五

サ

齋藤實盛 一六九
 酒のたとへ 二四六
 蝶蝶のたとへ 八八
 悟りきつたる男 四二

三味線を稽古した娘は浮氣者 八五
 三味線のたとへ 一八〇
 士のたとへ 一〇六
 さらぎせるといふ異名 二二二
 されども道は忘れざりけり 二二二
 三教一致 二四五
 山椒大夫 四四

シ

羞惡の心は義の端 一九八
 鹿の音 一一〇
 色欲 二〇
 死相 三一
 私心私慾の掃除 三六
 舌ばかり極樂 二〇九
 實情と思慮 二六
 實情の發るところ 二六

實體な息子 二七五
 芝居を見て悔悟 二七八
 芝居のうまみ 二七五
 司馬溫公 一八五
 障子のたて合せ 一五九
 商賣替をするな 二六三
 主人と雇人との心いき 五九
 出家の物語 四九
 私欲あらば其所は常闇 二二
 知れきつたこと 四三
 したた通を觀めよ 二八一
 心學とは何ぞや 七九
 心學のありがたき所以 二八三
 心學の開講 一
 神國の教は正直が第一 一一四
 信心者も地獄へ行くか 七四
 神道の正直と儒道の正直 二四

索引

仁の意義 二七五
 辛抱が大事 二七八
 辛抱づよき僕 二七五
 省察の工夫 一八五

セ

精神みちて隙間なし 二一五
 性の解 二七九
 性の徳 二五五
 小人と君子の別 二五七
 小人の困窮 一九三
 關所のたとへ 一九〇
 世間一般に通用する儉約の道 二〇
 世間の奢 七
 殺生 五五
 殺生の持病 五三
 戦國時代の有様 一三

五

先祖代々の家業が大事
先祖の儉約

二六一
三五

タ

泰平なる人心
道具屋のはなし
湯の盤の銘
竹の倒れぬ謂れ
立かへりの出来ぬ人
多人數に聞かせたし
煙草すきの男
煙草盆の掃除
旅する話で教訓
短氣者
談儀僧の咄

三四
二六五
一七四
一五五
一二二
一五
二三五
三四
七三
六六
一五〇

チ

町家は衰へ易し
忠孝はからだの養生
忠孝は天下の大本
中庸の首章
中和の意義
近道は役に立たぬ
地獄と極樂
長吉の失敗
長吉の返辭のたとへ
長壽の相
茶人の咄
茶や花の稽古より按摩の稽古
チヨンガレ坊主
土粥の製法
燕と雀の話

二一六
一七一
二二五
二七九
二〇五
七四
一〇七
二〇二
三一
一七七
八三
六二
一六
五四

テ

出来のわるい内儀のたとへ
手代の咄
手にあまる不孝者
天然で獵人が猿をとるとたとへ
天人一致、萬物一體
天の網はのがれられぬ

二八六
一七〇
九二
一九四
二九一
一一一

ト

藤樹先生の教
科をわび同行となる
時を知るが第一
徳孤ならず必ず隣あり

二五四
二五三
一八四
二二一

ナ

中澤道二先生の道話

八三

難儀に遭て心を惱まぬが學問の力
難産の咄

ニ

濁れる富と清き貧
日蓮上人の御詠歌
俄の儉約は争の原因
にわか目くらの咄
人相見

二三
二五〇
五八
一三
五
一九九
三〇

ネ

寢小便する子供
寢物語から後妻の變心

一四八
一三四

ノ

農家のたとへ

二五九

ハ

梅巖開講後の有様
 梅巖の立志
 賣卜先生
 邦幾千里これ民の止る所
 端唄「四つの袖」
 放心
 袴を著けざる理由
 博勞へ禮物
 はじめの覺悟が肝要
 耻に二種あり
 放し鳥
 はらわたの開帳に似た咄
 腹の吟味

二
 一
 六二
 二〇一
 八四
 二〇
 一四
 一七一
 一五三
 一〇四
 五
 一二七
 一五〇

額と齒のたとへ
 飛驒の山中の男の咄
 人を禽獸と同一視する理由
 一しぐれ時雨てもとの月夜かな
 人の氣質の清濁
 人の見聞かぬ所にこそ大事の場所
 人の道を勤めて飢饉を免れよ
 人は萬物の靈長
 獨を慎む修行
 瓢箪の川流れ
 百人一首で心の立直し
 貧のぬすみ
 婦人の順禮
 不孝な息子の咄
 不孝の悴

二〇四
 二六七
 一〇
 二七三
 二四二
 二五七
 一六二
 二七一
 二七六
 一七六
 一二〇
 一九六
 二四
 二二
 一〇

不孝者の感激
 不孝者ゆゑ追出さぬ

九
 二四八

ヘ

平生の志、事に當りてあらばる
 平生のより所が大事

一四〇
 一一六

ホ

奉公人
 豊年と凶年
 法華と淨土の宗論
 本心が合點せぬ
 本心に遠ざかるな
 本心に從へ
 本心の指圖

一八
 三五
 二四五
 二〇七
 一〇九
 八〇
 二三九

マ

眞の學問
 誠の寶
 馬士のわるさ
 貧しき家と富める家
 松茸のたとへ
 迷ひ犬

九
 五二
 二五一
 五七
 二四一
 二七〇

道を行ふの秘傳
 道は自由自在
 身を修る主は心
 身の分限
 身最負身勝手を捨てよ
 耳ばかり極樂
 名聞
 未來といふわなにかかる人

二七六
 二二八
 二〇
 二六二
 一六〇
 二〇九
 二〇
 四六

ム

昔のざんげばなし
昔は物を思はざりけり
娘の手紙
無理をせぬは人の道
無理のないのが人の心

一一二
一一三
一五三
八二
七九

メ

明德を明かにするの仕様
明德の玉
目くら、聾、聾のたとへ
目くらのたとへ
面つくりの咄

一四七
二八一
一八一
一八七、二五六
二一一

モ

物に相應あり

一〇

ヤ

揚弓のたとへ

二〇四

ユ

ゆがみについての話
油断のならぬ娘
指のたとへ

一一四
一五七
一〇二

ヨ

嫁と仲あしき婆々

七二

ラ

樂は心のうまれつき

一一四

リ

兩替屋のはなし

一〇八

利欲

利欲のわな

二一〇

レ

禮の本

一五

ワ

わが希望する世界

六三

我身を顧るが學問
わが本心をだます
わなを抜け過ぎた人
わなと知りつつわなにかかる
我なしとつとめた人の咄
我なしの傳授

一六七
二五〇
四二
二八
二一三
一四六

索引終

大正二年三月二十日印刷
大正二年三月廿五日發行

定價金五拾五錢

選訂者

依田喜一郎

發行者兼
印刷者

小林慶

發行所

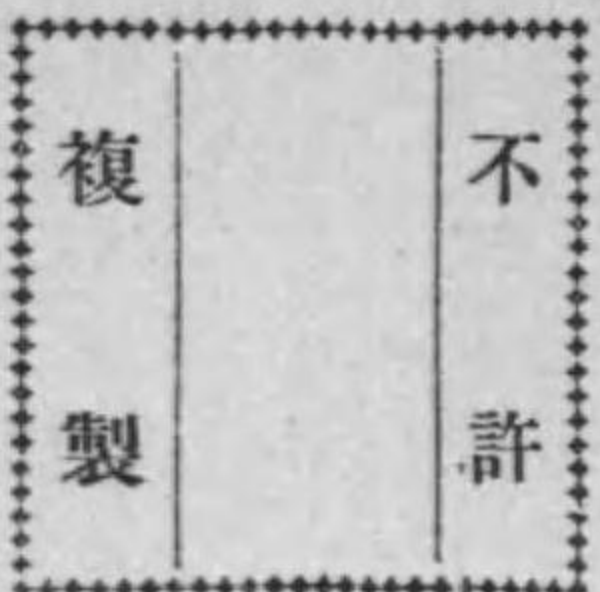
嵩山房

印刷所

博文館印刷所

賣
捌

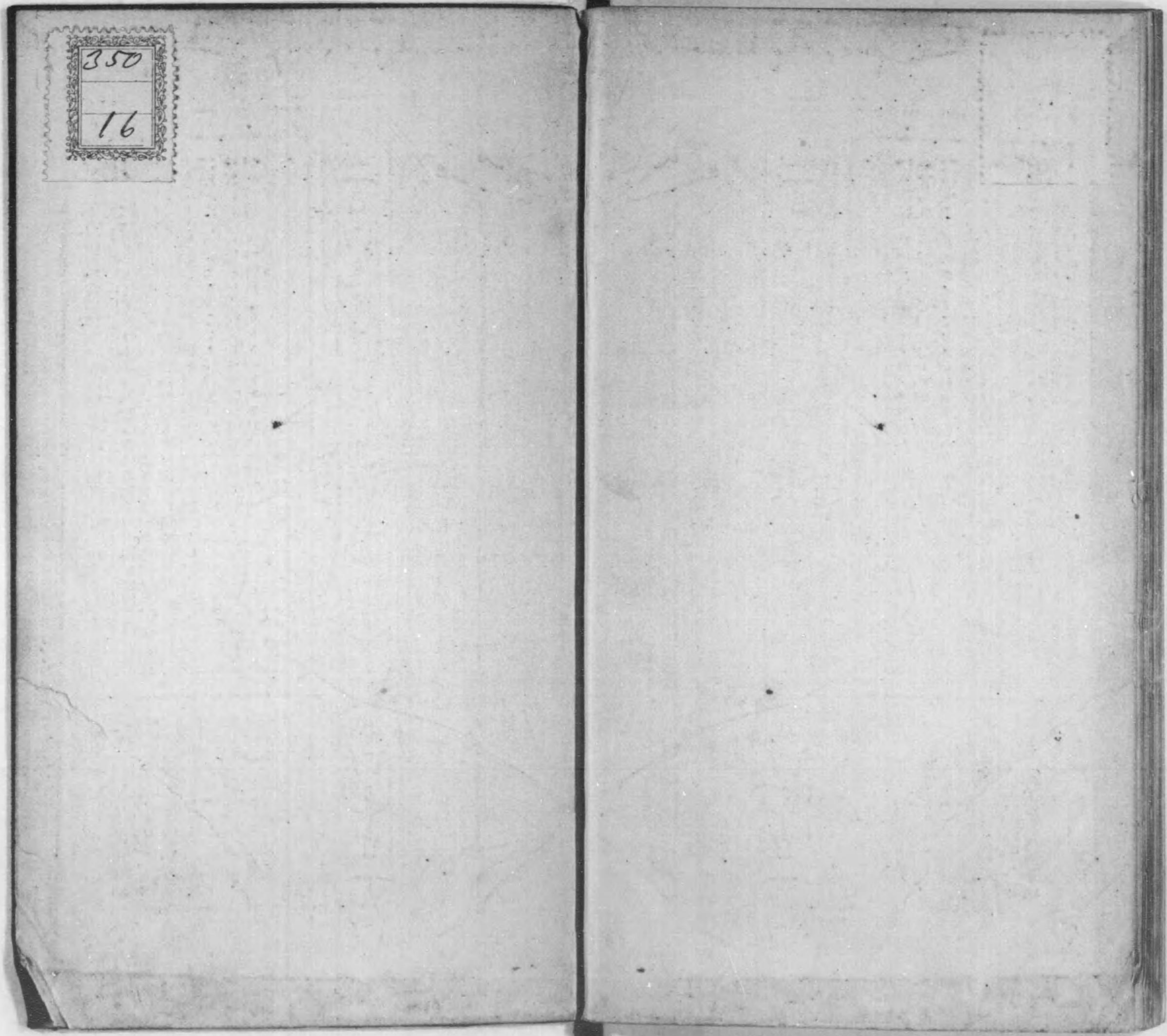
全
國
各
書
肆



東京市小石川區久堅町百八番地

東京市神田區錦町三丁目三番地

右同所 (振替東京六〇六九番)



350
16

終

